

2022 年度 北海道の労働と福祉を考える会

総会資料

2023 年 3 月 18 日

目次

はじめに	2
第1章 活動概要.....	4
第2章 人数調査&車中生活者調査	7
第3章 宿泊事業.....	14
第4章 学習会	18
第5章 炊き出し.....	21
第6章 夜回り	25
第7章 同伴・フォローアップ.....	27
第8章 お世話になった関連団体の皆様・寄付をいただいた皆様.....	31
第9章 会計報告.....	32
第10章 2022 年度会員名簿	34
第11章 審議事項.....	35
付録 私と労福会.....	37

はじめに

道中将浩

2022 年度はコロナ禍ではあったものの、世の中のコロナに対する意識は、慣れと呆れにより無関心なものに近づいていった。札幌でも外国人観光客を頻繁に見かけるようになった。経済状況も緩やかに回復してきていると耳にする。しかし、困窮者対応は以前と変わらず追われる 1 年であったように思う。

特に今年度の支援活動は、団体の力量を超えたものが多かったように感じる。炊き出し来場者の増加、炊き出しで起こるトラブルや要望への対応、札幌市での福祉施策を使い果たし相談してきた人への対応、言っていることと事実が食い違う人への対応、依頼人の都合で支援が進められないこと等、様々なケースに直面した。1 度として同じケースはないからこそ難しく、これらの対応に私たちは為す術がなく、仕方がないと匙を投げることを何度も経験した。夜回り前に行われる運営会議においては、毎回のようには時間を越え議論が終わらなかった。そのたびに労福会にもっと力量があればと無力感を感じつつも、ボランティア団体だからと割り切る必要性を痛感した。支援活動の報告に関しては、本章にてご覧いただければと思う。支援活動にご尽力いただいた方々、寄附をしていただいていた方々にはこの場を借りて感謝申し上げます。

2022 年 10 月 29 日、労福会を立ち上げられた杉村宏さんが亡くなった。ご冥福をお祈りいたします。1999 年に労福会が設立され、代が変わってもこの 24 年間継続してきた。ホームレス支援団体が継続しているということは、ホームレス問題も存在しているというジレンマはあるものの、ホームレス問題、貧困問題は単純には解決できない。この問題に対して活動を続けてきた労福会によって支えられた命、変わった人生があると思うと当団体の活動意義を感じる。ボランティアという立場においても、労福会の活動に参加したことが、貧困問題に対する見方が変わったり人生が変わったりするきっかけになったという話も耳にする。困窮者だけでなくボランティア側にも大きな社会資源となっていることも含め、改めて 24 年間を経て在る労福会の存在意義は大きいと感じる。

新型コロナウイルス感染症の発生から約 3 年、この総会が行われる 1 週間前にはマスク着用は義務から個人の判断に委ねること切り替わった。去年の春から大学の講義も基本的に対面開催となっている。ポストコロナの生活を迎えると同時に労福会も新たな出発を迎えているように思う。今年度は、労福会に新しく参加してくれる人が特に多かった。運営に興味を持ってきてくれて継続的に関わってくれる人も何人も出てきた。新たなメンバーが、おもしろい発想やエネルギーを持ってきてくれる。様々な年齢層の方が参加するという労福会の多様性は魅力的な部分だ。これまで力量不足によって匙を投げたことも多かったが、新たに加わったメンバーのおかげで出来ることも多くなるのではないかな。

改めて労福会の活動意義を確認したところで、今年度の活動を振り返り、これからの労福会について本総会で再度確認したい。当団体の歴史の一部として、総会資料の序章を書か

せていただいたことを光栄に思う。そして、この総会資料がこれからの労福会の活動に引き継ぐことに貢献できること願う。

第1章 活動概要

道中将浩

		活動の内容・その他
2月	5日	夜回りの実施
	7日	路上生活者 U さんの脱路上支援の手伝いを行う（聞き取り等）
	11日	路上生活者 Y さんから連絡を受け、食糧支援を行う
	12日	昨年脱路上支援を行った T さんのお宅へ伺いフォローアップ支援
	12日	夜回りの実施
	18日	路上生活者 U さんの脱路上支援の手伝いを行う（物件探し等）
	19日	クリスチャンセンターにて炊き出しを行う
	26日	拡大運営会議&簡易版夜回りの実施
3月	4日	路上生活者 U さんの脱路上支援の手伝いを行う（相談を受ける等）
	5日	夜回りの実施
	12日	総会を実施
	17日	路上生活者 T さんから連絡を受け、相談に乗る
	19日	大通り公園西 6 丁目広場にて炊き出しを行う
	26日	拡大運営会議&簡易版夜回りの実施
	30日	路上生活者 S さんに食糧支援を行う
4月	2日	夜回りの実施
	9日	夜回りの実施
	16日	大通り公園西 6 丁目広場にて炊き出しを行う
	23日	拡大運営会議&簡易版夜回りの実施
	26日	路上生活者 U さんの脱路上支援の手伝いを行う（荷物整理等）
	26日	路上生活者 Y さんから連絡を受け、食糧支援を行う
	30日	夜回りの実施
5月	7日	夜回りの実施
	14日	夜回りの実施
	21日	カナモトホールにて炊き出しを行う
	28日	拡大運営会議&簡易版夜回りの実施
6月	4日	夜回りの実施
	7日	路上生活者 Y さんに食糧支援を行う
	11日	エルムの里公園にて炊き出しを行う
	18日	夜回りの実施
	25日	拡大運営会議&簡易版夜回りの実施

7 月	2 日	夜回りの実施
	9 日	路上生活者 S さんを JOIN につなぐ
	9 日	中央区民センターにて炊き出しを行う
	16 日	夜回りの実施
	16 日	路上生活者 Y さんに食糧支援を行う
	23 日	拡大運営会議&簡易版夜回りの実施
	30 日	夜回りの実施
8 月	4 日	路上生活者 Y さんに食糧支援を行う
	6 日	夜回りの実施
	13 日	エルムの里公園にて炊き出しを行う
	16 日	生活困窮者 S さんに風呂券・食糧支援を行う
	19 日	路上生活者 Y さんに食糧支援を行う
	20 日	夜回りの実施
	27 日	拡大運営会議&簡易版夜回りの実施
9 月	1 日	これまで利用していた連絡ツール Slack が有料となる
	3 日	夜回りの実施
	5 日	路上生活者 N さんに衣類の支援を行う
	10 日	夜回りの実施
	13 日	路上生活者 Y さんに食糧支援を行う
	17 日	カナモトホールにて炊き出しを行う
	21 日	生活困窮者 M さんから相談を受け、今後の展望について考える
	24/25 日	白老にて 1 泊 2 日の研修合宿を行う
10 月	1 日	夜回りの実施
	4 日	路上生活者 N さんに会い、相談を受ける
	8 日	カナモトホールにて炊き出しを行う
	11 日	生活困窮者 S さんに食糧支援を行う
	15 日	夜回りの実施
	15 日	路上生活者 Y さんに食糧支援を行う
	22 日	拡大運営会議&簡易版夜回りの実施
	25 日	生活困窮者 M さんが入院中のためお見舞いへ行く
	29 日	夜回りの実施
11 月	5 日	夜回りの実施
	9 日	路上生活者 U さんから相談を受ける
	12 日	カナモトホールにて炊き出しを行う

	19 日	夜回りの実施
	26 日	拡大運営会議&簡易版夜回りの実施
	28 日	電力・ガス・食料品等価格高騰緊急支援給付金(6 万円)の給付が開始となり、当団体でもビラを配りや申請援助などを行う
12 月	3 日	夜回りの実施
	10 日	カナモトホールにて炊き出しを行う
	17 日	家出をした N さんとお会いし、相談を受ける
	17 日	夜回りの実施
	24 日	拡大運営会議&簡易版夜回りの実施
	31 日	大晦日夜回りの実施
1 月	7 日	夜回りの実施
	14 日	カナモトホールにて炊き出しを行う
	21 日	夜回りの実施
	22 日	一昨年、脱路上をした T さんの自宅に伺いフォローアップ支援
	28 日	拡大運営会議&簡易版夜回りの実施
	29 日	厚生労働省委託による路上生活者概数調査を実施する
2 月	1 日	生活困窮者 I さんにお会いし、脱路上支援の手伝いをする
	4 日	夜回りの実施
	11 日	カナモトホールにて炊き出しを行う
	18 日	夜回りの実施
	25 日	拡大運営会議&簡易版夜回りの実施

第2章 人数調査 & 車中生活者調査

大野慶

はじめに

本章の目的は、札幌市野宿者人数調査および車中生活者調査の概要と結果を報告することにある。以下、順に説明する。

1. 札幌市野宿者人数調査

札幌市野宿者人数調査（以下、野宿者調査）とは、厚生労働省「ホームレスの実態に関する全国調査（概数調査）」の一環として、札幌市から委託を受けた本会が実施した調査のことである。

（1）目的

ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法およびホームレスの自立の支援等に関する基本方針にもとづき実施される施策の効果を継続的に把握することである¹。

（2）対象

調査の対象は「都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所として日常生活を営んでいる者」（ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法第2条）である（以下、ホームレス）。なお、この調査では「車中生活者」（詳しくは次節を参照）も対象としている。前年に引き続き、札幌市と本会の事前協議・合意のもと、広義のホームレスとして調査対象に含めることになった。

（3）方法

調査員の巡回・目視により実施した。調査員がホームレスと思われる者を発見したときは、調査票に必要事項（人数・場所・性別・確認時刻等）を記入した。調査区域と主な調査ポイントを、図表1（次頁）に示してある。

（4）日時

2023年1月29日（日）午前2：00～6：00。

（5）結果

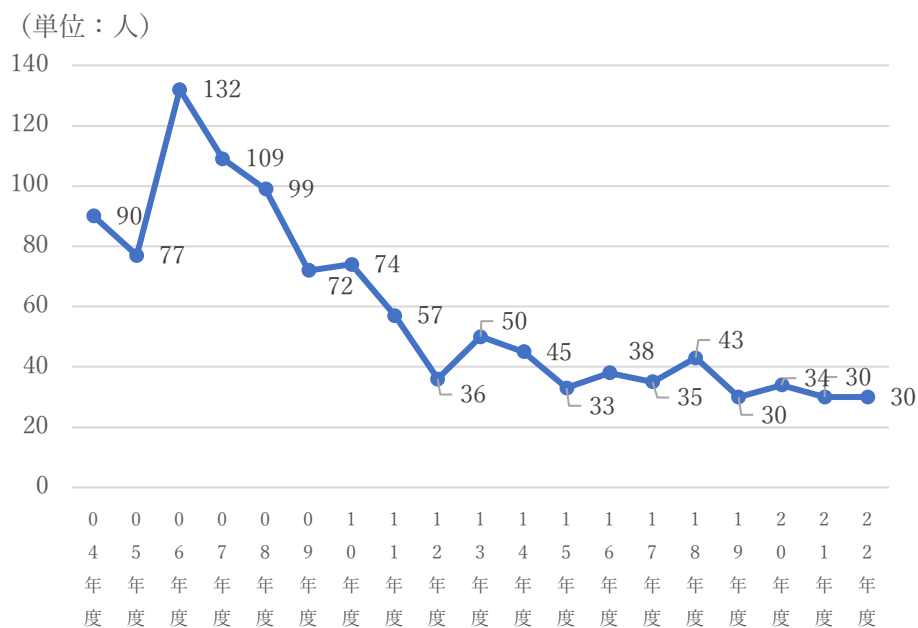
発見したホームレスは合計30人（このうち「車中生活者」は9人）にのぼった。合計人数は前年調査と同数である（図表2；次々頁）。ただし、「車中生活者」を除いた狭義のホームレスの人数は、前年から2人減少した。

図表3（次々頁）は発見した場所別・性別のホームレスの人数を示したものである。場所をみると、「その他施設」（13人）、「駅舎」（8人）、「河川」（4人）、「道路」（3人）、「都市公園」（2人）の順に多い。性別をみると、「男性」が大半を占め（23人）、残りはすべて「不明」である（7人）。

¹ 厚生労働省「ホームレスの実態に関する全国調査（概数調査）：統計の概要」
(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/63-15a.html#link01>)。

図表 1 調査区域と主な調査ポイント

調査地域		おもな調査ポイント
市街地	(A) 札幌駅周辺	札幌駅西口・北口、札幌駅バスターミナル、TSUTAYA、札幌ヨドバシカメラ店マック、東急周辺の地下鉄入口付近、植物園付近（東側のビル入口、地下街階段）、赤レンガ通り、ASTY45 階段など
	(B) 大通公園西部 ・狸小路北部（南 1・2 条）	札幌市役所、大通公園沿いのビル、大通公園から狸小路エリアのコンビニなど
	(C) 大通公園東部	地下鉄東西線バスセンター駅出入り口、中央バスセンター、フランスベッド、二条市場、サッポロファクトリー・永山記念公園周辺など
	(D) 狸小路・すすきの	狸小路 1 丁目～8 丁目、MEGA ドン・キホーテ札幌狸小路店すすきの店、ドン・キホーテすすきの店など
郊外地	(E) 札幌郊外南東部	中島公園、トライアル月寒店、西友清田店、自由空間札幌清田店、西友厚別店、ドン・キホーテ平岡店など
	(F) 札幌郊外東部	地下鉄白石駅周辺（バスターミナル）、地下鉄新さっぽろ駅周辺（JR 線含）、（タクシー乗り場）、厚別橋、大谷地橋など
	(G) 札幌郊外北東部	自由空間札幌北光店、ドン・キホーテ北 42 条店、トライアル伏古店、半田屋新道丘珠店、西友元町店、みずどり公園など
	(H) 札幌郊外西部	トライアル手稲前田店、トライアル手稲星置店、ドン・キホーテ手稲店、西友西町店、前田森林公園など
	(I) 札幌郊外北西部	屯田 9 条 3 丁目（ジェイフル、イトーヨーカドー周辺）、屯田 9 条 7 丁目付近の川沿い、新琴似グリーン公園、コープさっぽろしんことに店、ポプラ通、ドン・キホーテ新川店など
	(J) 河川敷	東橋、水穂大橋、豊平橋、南七条大橋、南 9 条大橋



図表2 札幌市におけるホームレスの人数の推移

出所：大野慶（2022）「人数調査」（大野慶・柿崎さとみ・北海道の労働と福祉を考える会編『2021年度 北海道の労働と福祉を考える会 総会資料』）の「図1 札幌市におけるホームレス数の推移」に2022年度の数値を追加して筆者作成。

図表3 2022年度札幌市野宿者調査で発見したホームレスの人数（場所別・性別）
(単位：人)

	都市公園	河川	道路	駅舎	その他 施設	合計
男性	1	2	3	4	13	23
女性	0	0	0	0	0	0
不明	1	2	0	4	0	7
合計	2	2	3	11	13	30

出所：令和4年度ホームレス概数調査報告書（2023年）

（6）課題

今年度は野宿者調査の今後のあり方を検討することを目的に、調査員を対象とする「人数調査参加者アンケート」を実施した。回答者は9人と少ないが、ここではその結果を報告することを通して、野宿者調査の課題および今後のあり方を考察するための基礎資料を提供する²。

² 設問の作成は道中將浩、集計は筆者が担当した。

1) 調査の満足度

図表 4 調査の満足度

(単位：人、%)

	1 (非常に不満)	2	3	4	5 (非常に満足)
実施要項の連絡	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (33.3)	2 (22.2)	4 (44.4)
実施要項の内容	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (22.2)	3 (33.3)	4 (44.4)
当日の会場場所	0 (0.0)	1 (11.1)	1 (11.1)	3 (33.3)	4 (44.4)
当日の流れ・スケジュール	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (22.2)	5 (55.6)	2 (22.2)

- ・ 実施要項の配信が遅かったので、関係者への連絡がギリギリになった。
- ・ 不満ではないが、もっと早くから内容の検討ができればよかったと思います（調査地の検討とか）

2) 調査区域・調査ポイントに関する意見

- ・ 狸小路から市電通り沿いに掛けてコンビニを網羅的に探索したが、イートインも夜は使えず、重点的に見る必要はないかと思われる。また、グリーンビル各所には監視カメラと守衛さんがおり、昔よりも厳しくなっているので建物内の調査は袋小路のドン・キホーテくらいでいいのではないのでしょうか。ドン・キホーテすすきの店は長居できないので省いてしまっても良いと思われます。併せて 5 時台であれば豊水すすきの駅周辺に駅が開くのをまっている人が歩き回っているように思われます。
- ・ 指定された調査箇所の中に、不要な箇所がいくつかあり、変更する必要がある。
- ・ 河川敷は雪が積もって大変危険ですので、安全対策が必要かと思われます
- ・ 郊外コースのメンバーの帰りが早く、カードゲームで遊んでいたのはいかがなものかと。今回は事前調査もやったので予想以上に早く終わった感じです。
- ・ 雪まつりの準備時期にかかるのであれば、狸小路北部エリアもくまなく回ったほうが良いと思いました。地下へつながる階段にお一人居たので、今年居たところを来年にも繋げられると良いと思いました。
- ・ 新札幌駅は広いので事前にどこを回るか検討できたらいいかもしれない

3) 交通手段に関する意見

- ・ 市役所前を走っている車を捕まえる方が早いかも。
- ・ わんわんタクシーという会社が夜中でも対応可能とのことだった。

4) その他の意見

- ・ 最低限の要所は抑えつつ、事前に地理的に詳しい場所を参加者に聞いておいて、班分けに反映させる試みは良いかもしれません。
- ・ 準備その他大変ご苦労様でした。

- ・ 路上生活者を発根したところを地図上にマークしていくと良いと思いました。調査が終わって再集合してから解散の間に発見箇所に印をつけてもらうのは来年につながるのではないかと思います。
- ・ 市街地エリアが18名しか確認できなかったということについては調査方法を再検討してもいいのかもしれないと思った。たとえば札幌駅や地下街が開錠する時間帯に出入り口でカウントするとかいい方法はないかなあと。

2. 車中生活者調査

車中生活者調査（以下、車中者調査）とは、野宿者調査に向けた準備作業としての位置づけを持つ調査である。前述したように野宿者調査は「車中生活者」も対象としているが、当日彼らをホームレスとして数え上げるには原則、車中者調査であらかじめ発見できた者に限るという条件付きとなっている³。このような事情ゆえに、車中者調査は野宿者調査に向けた重要な準備作業となっている⁴。

（1）目的

野宿者調査に向けて「車中生活者」および「生活している痕跡のある車両」を事前に把握することである。

（2）対象

調査の対象は「車中生活者」および「生活している痕跡のある車両」である。「生活している痕跡のある車両」とは「車内に寝具、衣服、家庭ごみなどが置かれた生活感のある車両」を指しており、このような車両を寝食の場所としている者を「車中生活者」と考えている。

（3）方法

調査員の巡回・目視により実施した。調査員が「車中生活者」と思わしき者および「生活している痕跡のある車両」を発見したときは、必要事項（日付、行政区、場所、ナンバープレート情報（登録地・分類番号・かな・指定番号）、車種、状況など）を記録した。調査員、調査区域および主な調査ポイントを、図表5（次頁）に示してある。

（4）日時

実施日は、東区：2023年1月16日（月）、1月22日（日）、清田区・厚別区：2023年1月25日（土）、西区：2023年1月20日（金）、北区：2023年1月17日（火）である。時間は各区で微妙に異なるものの、ほとんどの区で午前0：00から6：00までの間の2、3時間でおこなわれた。

（5）結果

³ 以上は原則であり、実際には、車中者調査で発見していない「車中生活者」についても、調査員の判断によりホームレスとして数え上げることは認められている。

⁴ 本来、当会の車中者調査の目的はこれだけにとどまらない。2020年度、2021年度の車中者調査は、単に野宿者調査のための根拠資料づくりにとどまらず、発見した「車中生活者」を具体的な支援につなげることも視野に入れて実施していたように思われる。しかし、2022年度の車中者調査は気がつくと、野宿者調査に向けた根拠資料づくりのためだけのものとなってしまった。

調査結果は図表 5（次頁）の右欄のとおりである。

図表 5 調査区域、調査ポイントおよび結果など

調査区域	調査員	調査年月日	調査ポイント	発見した人数・台数
東区	近藤良明 山田大樹	2023 年 1 月 16 日 (月)	トライアル伏古店、	1 人・2 台
			みずどり公園	0 人・1 台
			ドン・キホーテ北 42 条店	3 人・3 台
			西友元町店	1 人・2 台
		2023 年 1 月 22 日 (日)	トライアル伏古店	0 人・2 台
			半田屋新道丘珠店	1 人・2 台
			ドン・キホーテ北 42 条店	1 人・5 台
			自遊空間札幌北光店	1 人・1 台
清田区 ・ 厚別区	近藤紘世 大野慶	2023 年 1 月 25 日 (土)	自遊空間清田店	0 人・1 台
			西友清田店	0 人・1 台
			マックスバリュ清田店	0 人・1 台
			マックスバリュ厚別店	0 人・1 台
			西友厚別店	1 人・1 台
西区	柿崎さとみ 中村風五	2023 年 1 月 20 日 (金)	西友西町店	0 人・3 台
			前田森林公園	0 人・2 台
			トライアル手稲前田店	0 人・3 台
			トライアル手稲星置店	0 人・3 台
北区	小川遼 泉彩寧	2023 年 1 月 17 日 (火)	屯田 9 条 3 丁目（ジェイフル、イトーヨーカドー周辺）	0 人・1 台
			有朋高校付近の川沿い	0 人・1 台
			新琴似グリーン公園	0 人・1 台
			コープさっぽろしんことに店	0 人・1 台
			ポプラ通	0 人・1 台
			ドン・キホーテ新川店	0 人・1 台

出所：調査終了後、調査員から提出された記録をもとに筆者作成。

注：確認できた人数については、提出された記録の中にはっきりと人物の存在をうかがわせる記述があるものだけを数え上げているため、過少報告となっている可能性があることを断っておく。

（6）課題

さいごに、車中者調査について今後の課題を 1 点だけ指摘したい。それは、具体的に何を
もって「車中生活者」あるいは「生活している痕跡のある車両」として認定するのか、とい

う測定基準の問題である。これは繰り返し指摘されてきた問題であるが⁵、今年度も十分に議論することができなかった。ところで、測定基準に関する議論に際して留意すべきは、先行して概念（意味と理解、言説とイメージ）、定義（ある状態を識別するもの）の考察が欠かせないということである。最初に概念を考察せず、定義や測定基準に飛びつくと、定義や測定基準についての広範な意味や含意を見失うことになる。同様に、測定基準に関する議論から始めると、測定基準と定義の混合に陥るおそれがある⁶。以上を踏まえると、測定基準の設定には長い時間を要するかもしれないが、次年度以降、気長に議論されることを期待して本章を閉じる。

⁵ たとえば、山内太郎（2021）「車中生活者調査」（大野慶・長嶺卓・北海道の労働と福祉を考える会編『2020年度北海道の労働と福祉を考える会総会資料』）、大野慶（2022）「人数調査」（大野慶・柿崎さとみ・北海道の労働と福祉を考える会編『2021年度北海道の労働と福祉を考える会総会資料』）がある。

⁶ たとえば、日本では子どもの相対的貧困率を求める際に「可処分所得の中央値の50%」を測定基準としているが、これが定義として言及されることが少なくない。その最たる例が「今日、日本では7人に1人の子どもが貧困状態で苦しんでいます」というお決まりのフレーズである。

1. はじめに（事業の背景及び目的）

労福会の夜回りや炊き出し等で脱路上の希望がある人と出会った場合、これまでは JOIN や JOIN の分室に連絡して、時間外での対応をしてもらうといった形を取っていたが、これは各運営スタッフに対して時間外の労働を強いているという点で望ましくない。また、現在分室単位においては基本的に休日対応をそもそも行っていない。加えて、「では数日後に、〇〇（場所）でお会いしましょう」といった当事者がいつの間にかいなくなってしまうといったケースも少なくない。

従って、JOIN や役所などが業務をしている週明けまでの間については、何らかの手段で当事者の居所を確保しておき、然るべき日になった後に適切な支援に繋げるという体制があった方が望ましい。このような考え方のもと、本年度については宿泊事業に係る予算を計上し、実際に実施した。

なお、構想当初はさぽーとほっと基金を申請する予定ではあったが、時間的な都合から前期申請に間に合わず、かつ、実際に運用して見た結果適用件数が少なかったことから後期申請についても見送ったため、結果として自主財源のみでの運営となった。

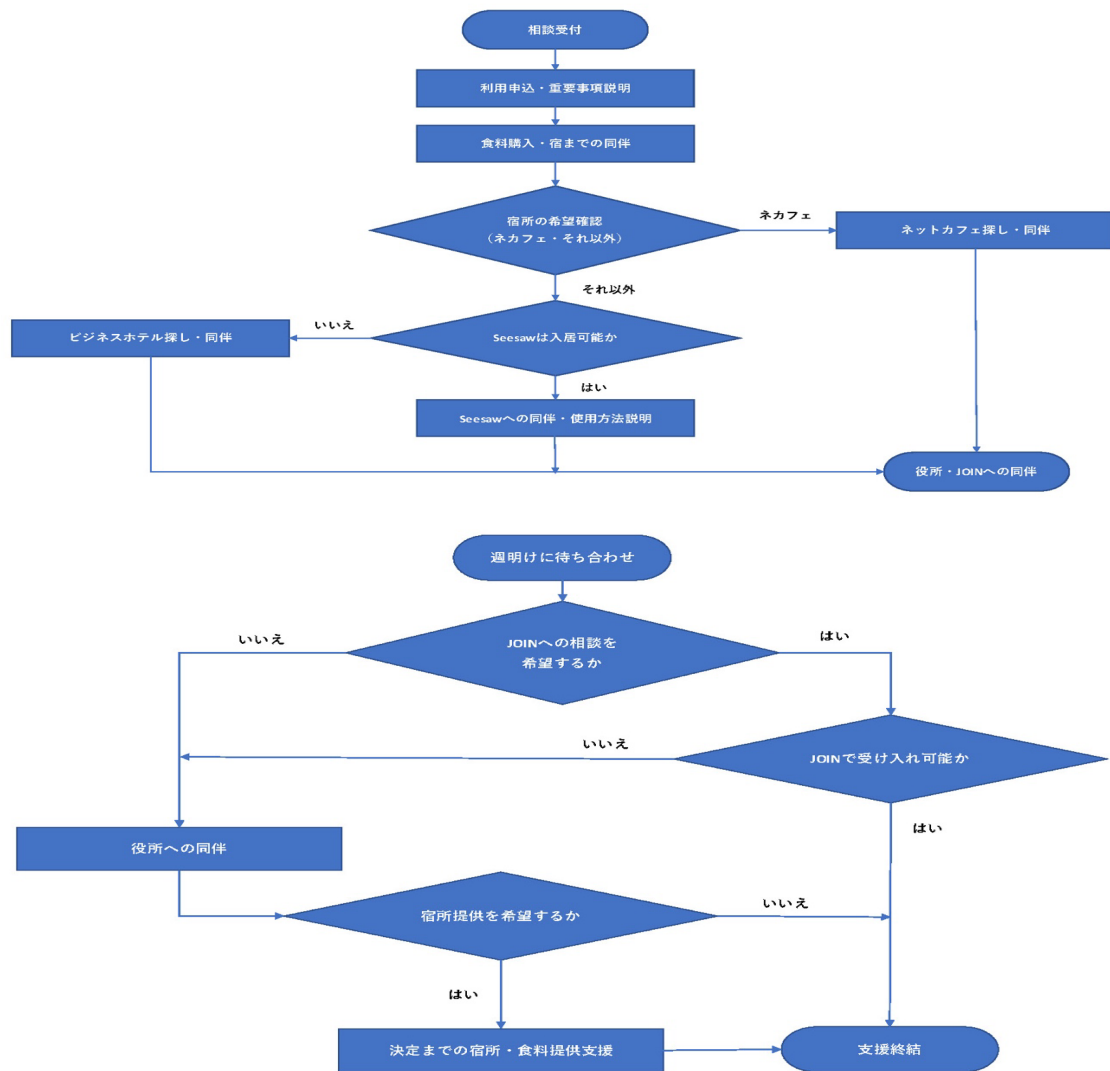
2. 事業概要

対象となる人は、基本的に「脱路上に向けた具体的な展望が共有できる人」とした。これは例えば、「雪が降っているために今日だけは泊まりたい」といった人まで対象とした場合、対象となる人が際限なく増えてしまう可能性を考慮してのことである。

提供するサービスは、土日（翌日が祝日の場合月曜日まで）の宿所⁷提供及び、その間の食事の提供、そして宿所提供終了後の申請手続き等への同伴である。ただし、生活保護には申請したが、JOIN のシェルター等の施設を何らかの理由があって利用できない方の場合には、保護決定までの期間についても、宿泊事業の対象とした。

実際の運用に当たっては、以下のフローチャートを作成し、それに則る形で運用していた。

⁷ 委託先として主に利用させて頂いていたのは、Seesaw Books という民間のシェルターである。以下のフローチャートに登場する「Seesaw」は当該シェルターの略称。



3. 事例

年度を通じて適用件数は2件であった。以下に簡単な報告を記す。

3-1. Nさんの事例（日時：2022年10月5日，対応者：長嶺）

<状況>

50代男性。不払い給与について雇用主と争っており、相談受付及び対応を行った翌日には何らかの結論が出そうではあるが、それまで宿がないという状態。JOINの利用歴はあるが、職員の対応に不信感があったため利用希望せず。かつ、札幌以外の場所に住居があり、帰ることを希望しているため、生活保護の利用も難しい。

<結果>

一泊の利用を認めたが、事態の進展は特に無かった。不払い給与については結局本人の中で納得できないため、路上生活を継続するに至った。相談対応は継続。

3-2. Tさんの事例（日時：2022年12月17日，対応者：小川・泉・近藤（紘）・須田）

<状況>

50代男性。母親と二人暮らしをしていたが、就労継続支援事業を辞めるにあたり相談室や母親とトラブルが起きる生じることを恐れて家を飛び出した。週明けの生活保護申請が考えられる状況であったが、季節の事情もあり、宿泊事業の利用が考えられた。

<結果>

ホテルが満室の状況ではあったが、探した結果ラブホテルを一室確保することができた。ともかく一晩考えるように伝え、JOINの連絡先等についても案内したが、結果としてその後連絡が来ることはなかった。以降不明。

4. 所感

いずれのケースについても、結果を見ると宿泊事業の効果があったかはかなり怪しい。特に、主目的であるはずの、「次への繋ぎ」がうまくいっていない印象が強い。そのように考えると、（当然と言えば当然の話ではあるが、）枠組みを設計した時に想定したような、「宿所を提供することで一定の信頼関係を労福会と築く」といった現象は甘い部分があったと言わざるを得ないだろう。

また、利用件数についても2件に留まった。これは、会員間で制度の共有ができていなかった点もあるのではないかと反省しているところではあるが、そもそもこの制度はあまり必要がないと解することはできるだろう。ただ、件数について付言すると、想定していたようなケースが今年度は偶然に少なかったという可能性もあると考えている。現に、昨年度は休日にJOINの分室にお願いするようなケースは私（長嶺）が対応した事例だけでも3件ほどあった。3-2のケースはこれに近いところはあるが、それにしてももう少し件数があったとしてもおかしくはないはずである。

5. 今後について

今年度の実績は2件に留まったが、今後もこの宿泊事業という枠組み自体は保持しておいて損はないように思われる。

理由は二つあるが、一つは、数は少ないにせよこの事業を必要とするケースは依然として考えられることが挙げられる。これに関しては、数年運用する中で平均的な数が見えてくるのではないかと考えている。もう一つは、対応に困るようなケースで、選択肢をひとつ増やせることには少なからぬ意義があると考えているためである。無論、極めて柔軟に運用して良いということを言いたいわけではないが、やはり提示できる選択肢はなるべく多い方が良好だろう。

また、予算面においても、当事業により大きく財政を圧迫するといった自体は、あくまで現時点においては考え難い。従って、メリットがあることも踏まえると、残すことによ

る不都合も特にはないと考えられる。

第4章 学習会

文責：長嶺卓

今年度の学習会については、合宿形式で実施した。昨年度までは、拡大運営会議の一部の時間を活用するなどの形式で実施していたため、今年度の取り組みは新たな試みであった。

1. 目的

合宿形式で実施する目的としては、以下の3つが挙げられた。

① 会員の確保と参加率の向上

→2022年度の活動方針の中に、「会員の確保及び参加率の上昇を目指す」というものが挙げられていた。新たな会員が増えることは、会の同質化及び活動の硬直化を防ぐ一因になりうるだろうし、特にメンバーの入れ替わりのスパンが短い大学生が運営に携わるということは、当会が20年以上活動を継続するにあたり少なからぬ影響をもたらしていたと考えられる。そして、会員の確保に当たっては、「魅力的な活動を行うこと」と「それを発信すること」が不可欠となってくるであろうが、ことに後者を行うに当たっては、会の活動に積極的に関わろうという意識を持った会員の育成が必要である。合宿を通じて、会員相互のメンバーシップを高めて労福会への所属意識をより強く持つようになったり、会員個々が労福会に対する理解を深めて活動の魅力を（例えば初めて参加した人などに）伝えることができるようになったりするようなことが期待できる。

② 「学習会」を活動にきちんと捉える機会に

→労福会の活動を通してホームレス問題や貧困問題をテーマにした卒業論文に取り組む人が毎年何人かいたり、労福会の活動にかかわる分野で仕事をしたりしている人が会員にも数名いるが、「考える会」として私たちがこれらの人たちから学ぶことは少なくないと思われる。あるいは労福会の支援団体としてのあり方という大きな議論や個々の支援活動の内容の検討なども普段の活動の中では十分に議論ができていない。合宿形式で時間を十分確保してみんなで理解を深めあうことは「その1」で示した会員相互のメンバーシップを高める意義もあると考えられる。

③ 労福会の活動を変化に富んだものにするために

→毎週土曜日の夜回りと毎月の炊き出しはもちろん重要ではあるが、活動のメニューは多いほうが楽しいし、新しいことに取り組んだほうが組織は活性化するだろう。（しかし、企画そのものが大きな負担になるのであれば逆効果となってしまう可能性もあるため、無理のない範囲の内容を考える必要はある。）

上記の目的について、運営会議等で共有を図った上で希望者を募り、2022年9月24日（土）～9月25日（日）に、会員である米本智昭さんが住職を務められている青峯山観音

寺の一室をお借りして合宿を実施した。

2. 実施内容

以下の3つの内容について、約1時半ずつの学習会を行う予定であった。

・「貧困と健康に関する山内研究室からの研究報告」

→発表者が諸事情により参加できなかったため実施できず。

・「生活保護世帯の子どもの高等教育『修学』機会」

→会員である大野慶さんによる論文。内容の紹介及び質疑応答を行った。

・「住居喪失者 Y さんについての事例検討」

→会に対応していたがなかなか進展が見られなかった方について、今一度状況を整理するとともに、今後の支援の方向性についての議論を行った。



(実施風景)

3. 所感等

まず有意義であったと考えられる点としては、会員が会の外で行なっている活動についてその一端を知る機会を提供することができたという点が挙げられる。労福会は多様な人々の集合であり、各人がやっていることについて共有を図ることもまた「硬直化」を防ぐことに寄与しうるだろう。他にも、ケース検討について腰を据えて考えることができたという点も大きかった。運営会議の場でも行うことはままあるが、どうしても時間的制約は存在しており、なかなか「じっくり議論する」のは難しいという印象が拭えない。

ただし、これは「学習会」全体を通して言えることであるが、今年度の学習会の開催がこの合宿のみであったということは、惜しむべき点ではあるように思われる。写真を見ても分かる通り、合宿の参加者は会全体の人数から見れば非常に限られており、かつ各々の会員の忙しさ等の事情に鑑みた場合、「全員が参加するような合宿」という構想はし難い。目的の②で述べられているが、学習会そのものの実施意義はあるだろう。とすればやはり、合宿以外の機会でも学習会を実施する方が望ましい。拡大運営会議の場において学習会を併せて実施した例もあったが、今年度の会議の様子を考えた時、議論することが尽

きないが故になかなか実施が難しい状況にあったように思われる。

第5章 炊き出し

近藤良明

2022年度（2022年2月～2023年1月）の炊き出しは、昨年につきコロナ禍の炊き出しとなり、感染対策を含め様々な工夫を行ないながらの炊き出しとなった。2021年5月より毎月開催の炊き出し（基本は第2土曜日）となり、同年4月より代表や事務局長の負担軽減と、炊き出し実務のパターン化を目的に炊き出し事務局チームが結成され、準備や運営を担っている。

今年度も民医連との共催を継続。また2月と10月はこれまで同様、札幌司法書士会と共同で開催した。

最終的にこの一年間に炊き出し会場に訪れた方は延べ653人（前年度490人）、平均54人（前年41人）、同時に行った夜（昼）回りで声掛け93人、物資を渡せた人67人。参加ボランティアの合計は延べ326人（前年273人）平均27人（前年23人）となった。

この間、セクハラ対応や飲酒による乱暴な言動がたびたび問題となり、検討・対策を進めている。

この1年間の炊き出しの毎回の特徴点は以下の通り。

○2月19日

午後2時から北海道クリスチャンセンターで行った炊き出しには、38人が訪れた。同時に、札幌駅やチカホ、狸小路などを回る外回りを3チームで行い、12人に声をかけ10人にお弁当等の物資を渡した。「まん延防止等重点措置」期間中だったこともあり、感染対策を最優先にし、衣類配布や散髪は行わず、お弁当や生活物資の配布のみに限定して行った。いつものお弁当、お茶、カイロやマスクの他にフードバンクより「雪だるまチョコ」を頂き5日遅れのバレンタインデーということで参加者に手渡し喜ばれた。Yさんから、臨時特別給付金の相談があった。札幌司法書士会、民医連と共催でボランティアは19人参加した。

○3月19日

午後2時から大通公園西6丁目で行った炊き出しには、47人が訪れた。同時に、外回りをいつもの3コースで行い、5人に声をかけ3人に物資を渡した。「まん延防止等重点措置」期間中だったこともあり、感染対策を最優先にお弁当や生活物資の配布のみに限定して行った。3月はホワイトデーということで、メモワールで購入した特製クッキーも渡され参加者に喜ばれた。生活相談、医療相談もそれぞれ1件。会員の竹田桃子さんのご協力で「衣料品」配布をメモワールで行うことが可能となり、参加者を誘導した。民医連との共催でボランティアは24人参加した。

○4月16日

午後3時から前月に続いて大通公園西6丁目で行い、49人が訪れた。同時に3つの外回りチームが活動を行い、10人とつながることが出来た。引き続きコロナ禍の中で、お弁当や生活物資の配布のみに限定しての活動とした。今月も竹田さんのお店で「衣料品」配布を行っていただき30人が来場されたとのこと。民医連との共催でボランティアは20人参加した。

○5月21日

今回ここ数年でははじめてカナモトホール（札幌市民ホール）を会場に炊き出しを行なった。18時30分開始。会場準備に若干時間を要したが、衣料配布や散髪（8人）も行い全体としてほぼ計画通りの運営を行うことが出来た。竹田さんが春物衣料品をたくさん集めて頂いた。最終的に48人が来場。夜回りでは2チームで11人とつながり、1人をシェルターに繋いだ。ボランティアは27人参加した。

○6月11日

今回久しぶりにエルムの里公園を会場に午後4時より炊き出しを行なった。ボランティアが30名に届かず、21名だったため、各部門の人数を縮小し、特に夕まわりは9名から3名とすることになった。

また、当日になって2名欠席が出たが、2名が新たに参加することになり、なんとか対応をすることができた。最終的に先月のカナモトホールより一人多い49人が来場。血压医療相談を再開し7人が血压チェック（全員高め）、生活相談は1件（生保相談）。夕回りでは7人とつながり4人の方に菓子パンなどを渡すことができた。

○7月9日

中央区民センターで午後6時30分より開催。ボランティア35名募集したが、31人の集約のため夜回りを1チーム減らす。当日までに体調不良で3人が欠席となったが、新たに3人が参加してくれ、事なきを得る。来場者や51人と今年一番多かった。初参加の方が多くみられ、「夜回りでチラシをもらって」「ネットでみて」などの声があった。散髪や血压健康相談も行われ、夜回りでは、5人とつながり2人に物資を渡す。生活保護相談が医療で1件、夜回りで1件ある。

○8月13日

エルムの里公園で午後4時より開催。ボランティアは23人。北海道が「BA5対策強化宣言」を10日に発出したこともあり、規模縮小して開催。来場者は53人先月を上回る。血压健康相談も20人、夜回りでは、11人とつながり7人に物資を渡す。生活保護など相談が2件ある。

○9月17日

午後6時30分からカナモトホールを会場に行う。来場者は今年最高の61人。会場では、これまで同様お弁当、カップ麺、お茶、マスク、タオル、歯ブラシ、市内公衆浴場の入浴券などが配られ、また、秋冬物衣料品をそれぞれ選んでもらった。また、血圧測定・健康相談に16人、散髪も13人に行われた。

○10月8日

10月から3月までは、カナモトホールの会場抽選会に参加して一括して会場確保を行う。10月9日は午後6時半から開始し、先月とほぼ同じ60人が訪れた。また、同時に行った「夜回り」でも、7人とつながり6人に菓子パンなどの物資を渡した。血圧測定・健康相談に15人、散髪も7人に行われた。

○11月12日

午後6時30分から開始し、61人が訪れた。同時に行った「夜回り」でも4人とつながり菓子パンなどの物資を手渡すことができた。ボランティアは30人で、労福会、民医連のほかにNPO法人きなはれ（障がい者就労支援施設）から参加があった。「きなはれ」さんは低価格でお弁当を準備してくださり、今後とも年に1～2回参加したいとのこと。



○12月10日

18時30分より開始。来場者62名となった。散髪11人、血圧測定12人、お風呂券渡し60人・夜回り2チーム（札幌7人つながり）、（大通り地上、地下8人つながり）計17人とつながる（地下、おにぎり配っている団体あり）。ボランティアは33人。クリスマスプレゼントとして、メモワールよりクッキーを購入し、来場者に渡し喜ばれた。地方創生臨時交付金のお知らせを行い2人の方が手続き等の相談につながった。

○1月14日

午後6時30分より開始した炊き出しには過去最高となる74人が訪れた。生活の困窮、知人からの紹介や口コミなどにより初めての来場者が多数みられ、同時に行った「夜回り」でも6人とつながり菓子パンやマスクなどの物資を手渡すことができた。ボランティアは34人。

2022年度炊き出しのまとめ				夜回りなど		ボランティア参加人数				
日付	会場名	時間帯	来場者	声かけ	物資渡し	労福会	民医連	司法書士	合計	備考
2月19日	クリスチャンセンター	14時～	38	12	10	12	3	4	19	蔓防中、衣料品、散髪中止
3月19日	大通公園	15時～	47	5	3	18	6		24	メモワールで衣料品配布
4月16日	大通公園	15時～	49	10	8	14	6		20	メモワールで衣料品配布
5月21日	カナモトホール	18時30分～	48	11	7	18	9		27	散髪再開、シェルターへ1件
6月11日	エルムの里	16時～	49	7	4	14	7		21	血圧測定再開
7月9日	中央区民センター	18時30分～	51	5	2	21	10		31	散髪あり
8月13日	エルムの里	16時～	53	11	7	16	7		23	
9月17日	カナモトホール	18時30分～	61			16	12		28	夜回りでできず
10月8日	カナモトホール	18時30分～	60	7	6	15	20	7	42	奈良民医連より参加有
11月12日	カナモトホール	18時30分～	61	4	4	16	8		24	きなはれ6人
12月10日	カナモトホール	18時30分～	62	15	10	27	6		33	
1月14日	カナモトホール	18時30分～	74	6	6	26	8		34	
		合計	653	93	67	213	102	11	326	

第6章 夜回り

楠高志

次ページの表は、令和4年2月から令和5年1月までの、当会の夜回り活動日ごとの、各コース別の参加者と会った当事者の数を、Slackの報告から拾い集めたものである。Slackの移行に伴った更新により、理由が分からないが、令和4年9月17日から10月29日までのデータの表示が無く、拾えなかった。記録によると間違いなく夜回りは行っている。

一昨年5月から開始した、Slackによる夜回りの報告を年度末に拾う作業を行う際に気づいたことだが。報告漏れは。有り得ると思われる。なので、年度を通した、参加者数と会った当事者通の合計は、必ずしも正確とは言えないことは、あらかじめ断っておく。また、炊き出しと同時の夜回り（昼廻り含む）は、参加者数を炊き出し事務局が決めていて、自由に参加した人数とはカウントできないので、これも除外した。2022年度の合計の参加者数は、前年の2021年度と比べて、かなり増加しているが、これはデータが不完全だった2021年度と比較しても意味は無い。参加者が増えた現象ではなく、報告が安定的になされるようになった結果と思われる。夜回り1日あたりの参加者数は、比較してもほとんど変わらない事が伺える。

むしろ目立った特徴は、会った人の1日平均で、これを比較すると、2021年度の19.5人から、2022年度の23.2人と、増加傾向を見て取れる。この現象について、私は次のように考えている。

我々労福会がほぼ毎土曜日、夜の時間帯に町中を廻っていることが、野宿者を含む経済的に困窮している人たちに知れ渡り、いくばくかの物資あるいは有用な情報を求めて、またはいろいろなコミュニケーションを取りたいがため、集まってくるのだと思う。

昨年のこの項目にも書いたが、大通駅改札口南の広場で、我々が当事者に声かけをして活動をする際に、札幌市交通局の職員から、禁止行為だと言われることがあった。これに対しては、その職員さんが認識されるような、「不特定多数の人たちに対する配布行為」ではなく、我々が対話の中から、支援が必要だと認められる特定の人物に対してのみ行う「支援行為」だと主張していく。今まで通り夜回りを続けていきたい。

今年度は、路上生活者の主のような存在であるテレビ塔下のKさんも、ついに、施設入所に至った。またそのKさんが名付けた、ロシアの人と思われる仙人のような風貌のRさんは亡くなってしまった。背骨が曲がったMさんは、健康上かなり厳しい状況にある。夜回りで会う人たちのメンバーも、少しずつ変わって行き、長い目で見れば以前とは異なる構成になるだろう。その中で、変わらないものは何だろうか？

2022年度夜回りデータ											オーロラ		
参加者						会った人		創世					
西	河川	スス	チカ	駅	計	日付		計	駅	チカ	スス	河川	大通西
	3	5	5	5	18	令和4年2月5日		30	6	20	3	1	
	3	4	3	3	13	2月12日		23	4	12	6	1	
						2月19日 炊き出し							
			5	5	10	2月26日		9	0	9			
	3	4	6		13	3月5日		31		21	9	1	
	3	4	4	2	13	3月12日		30	4	20	5	1	
						3月19日 炊き出し							
		4	5	4	13	3月26日		11	0	8	3		
	4	4	5	3	16	4月2日		25	4	14	3	4	
	2	3	4	4	13	4月9日		23	4	12	7	0	
						4月16日 炊き出し							
3		4	5	5	17	4月23日		19	1	7	7		4
3		3	3	3	12	4月30日		24	3	14	4		3
	2	5			7	5月7日		26		20	6	0	
3			7	4	14	5月14日		30	6	20			4
						5月21日 炊き出し							
			3	2	5	5月28日 簡易		14	4	10			
3	2	3	7		15	6月4日		27		22	2	1	2
						6月11日 炊き出し							
3		3	3	4	13	6月18日		24	4	15	3		2
2		2	2	2	8	6月25日		8	2	2	3		1
3		4	4	2	13	7月2日		24	5	14	4		1
						7月9日 炊き出し							
2	2	2	6	3	15	7月16日		33	8	17	2	3	3
	2	2	3	2	9	7月23日		20	8	4	4	4	
		4	3	3	10	7月30日		32	4	21	7		
	2	4	5	3	14	8月6日		30	4	20	5	1	
						8月13日 炊き出し							
2		3	5	3	13	8月20日		28	6	12	7		3
1		5	3	3	12	8月27日		21	7	8	4		2
3	2	3	5	3	16	9月3日		36	5	22	5	1	3
	2	3			5	9月10日		9			7	2	
						9月17日 炊き出し							
						↓ データ無し							
						10月29日							
	2	6	3	4	15	11月5日		33	6	21	5	1	
						11月12日							
						11月19日							
						11月26日							
	3	4	8	6	21	12月3日		31	6	22	2	1	
						12月10日 炊き出し							
	3	4	5	3	15	12月17日		20	5	11	3	1	
	3	3	4	5	15	12月24日		22	6	13	2	1	
	2	2	3	2	9	12月31日		27	8	16	2	1	
3	2	4		3	12	令和5年1月7日		13	8		4	1	0
						1月14日 炊き出し							
		4		6	10	1月21日		9	4		5		
						1月28日 休み							
					404	合計		742					
					12.6	平均		23.2					
					317	2021年度		487					
					12.68			19.48					

第7章 同伴・フォローアップ

山内太郎・長嶺卓

今年度は生活保護申請の同伴活動はほとんどなかった。しかしそれは労福会の支援活動が夜回りの声掛けと炊き出し時の物資提供だけだったということを意味しているわけではない。もっと会の外部からは見えないような、マニアックで細かい、いわば毛細血管のような支援が張り巡らされていたのである。それを一つずつ取り上げて解説するような余裕はない（すでにこの原稿を書いている時点で〆切2時間前）。したがってここでは、毛細血管的な支援の概要を一覧に示すことにとどめておこう。

表●は Slack「支援活動報告」チャンネルに投稿のあった内容を抜き出したものである。ここからは特定の人物に何度もフォローアップ的な活動がされていることが分かるだろう。こうした地道な活動の繰り返しが当事者の方たちとの信頼関係を築くことになっていると考えている。

表●は Slack「労福会の日記」チャンネルに投稿のあった内容を抜き出したものである。路上生活をされている方からの相談もあるが、ほとんどが居宅生活をされている方からのものである。ホームレスとは路上生活の状態だけでなく「居場所」をなくした状態全般を指す言葉なのだと捉えれば、「話を聞いてほしい」という内容の電話に対応することもホームレス支援と呼べるのかもしれない。とはいえ、このあたりになると労福携帯を持った人の負担の大きさが問題となるだろう。どこまで労福会で対応すべきかを検討するとともに、対応者が一部に偏ることなく、多くの人がホームレス支援に関われるようになることが今後の課題となる。

表● 支援活動の内容一覧

日付	当事者	性別	状態	主な内容	対応者
2/1	Kさん	男	路上	路上での状況報告	須田
2/7	Uさん	女	路上	アンタプット同行	長嶺
2/8	Wさん	男	居宅	年金請求動向	千葉
2/9	Uさん	女	路上	部屋探し→役所同行	山内
2/11	YDさん	男	居宅	訪問、食料提供、相談	長嶺・須田
2/14	TJさん	男	居宅	居宅訪問（アフターフォロー）	千葉・朝野・山田
2/17	Wさん	男	居宅	居宅訪問（年金請求の書類を渡す）	千葉
2/17	Uさん	女	路上	電話による相談対応	山内
2/18	Uさん	女	路上	部屋探し	山内・千葉
2/27	Uさん	女	路上	メールによる相談対応	山内
3/5	Uさん	女	路上	部屋探しに関する相談（訪問）	千葉
3/14	Uさん	女	居宅	預かっていた荷物を届ける	山内

3/17	TK さん	男	路上	話を聞いてほしい（チカホ訪問）	道中※
3/18	YB さん	男	居宅	給付金申請支援	千葉
3/22	YK さん	男	路上	給付金申請支援	楠
3/29	K さん	男	路上	路上での状況報告	須田
3/30	S さん	女	路上	あじーるの支援紹介	柿崎・波田地
3/30	K さん	男	路上	路上での状況報告	須田
4/26	U さん	女	居宅	荷物運び	楠
4/26	YD さん	男	居宅	訪問、食料提供、相談	長嶺
5/1	U さん	女	居宅	メールによる相談対応	山内
5/7	YD さん	男	居宅	訪問、食料提供、相談	長嶺
6/4	M さん	男	路上	退院に同行	近藤※
6/17	M さん	男	路上	路上での状況報告	須田
6/21	U さん	女	居宅	メールによる相談対応	山内
7/11	SW さん	男	路上	JOIN への同行	早川
7/12	SW さん	男	路上	路上での状況報告	須田
7/19	YD さん	男	居宅	訪問、食料提供、相談	長嶺・佐竹
8/4	YD さん	男	居宅	訪問、食料提供、相談	長嶺
8/16	ST さん	男	居宅	訪問、食料提供、相談	長嶺
9/5	N さん	男	路上	衣類提供	近藤
9/8	D さん	男	居宅	近況報告	楠
9/13	YD さん	男	居宅	訪問、食料提供、相談	長嶺
9/21	M さん	男	路上	通報による対応	小川
9/30	U さん	女	路上	電話による相談対応	山内
10/4	N さん	男	路上	訪問、食料提供、相談	長嶺
10/5	N さん	男	路上	訪問、相談	長嶺
10/14	S さん	男	居宅	訪問、食料提供、相談	長嶺
10/15	YD さん	男	居宅	訪問、食料提供	長嶺
10/25	M さん	男	路上	見舞い、物資提供、相談	小川・山田
11/8	U さん	女	路上	訪問、相談	楠
11/11	S さん	男	居宅	申請同伴	楠
11/14	不明	男	居宅	訪問、食料提供、相談	須田・楠
11/15	I さん	男	路上	申請同伴	長嶺
11/16	U さん	女	路上	メールによる相談対応	山内
11/25	U さん	女	路上	メールによる相談対応	山内
11/27	N さん	男	路上	訪問、相談	長嶺

12/9	U さん	女	路上	メールによる相談対応	楠
12/17	N さん	男	路上	相談対応、宿泊事業対応	小川・泉 近藤・須田
12/17	Y さん	男	路上	給付金申請支援	小川
1/22	T さん	男	居宅	訪問、アフターフォロー	朝野・山田
2/1	I さん	男	路上	訪問、相談	山内
2/3	S さん	男	居宅	メールによる相談対応	山内
2/13	I さん	男	路上	メールによる相談対応	山内
3/7	N さん	男	路上	メールによる相談対応、テレカ提供	柿崎
3/8	N さん	男	路上	訪問、相談	長嶺

表● 電話による相談内容一覧

日付	かけた人	性別	状態	主な内容	受けた人
2/17	U さん	女	路上	部屋探しについて	山内
2/18	地域包括支援センター	不明	居宅？	生保受給している人向けのシェルターはないかという問い合わせ	長嶺
3/17	TK さん	男	路上	話を聞いてほしい	道中
5/11	KH さん	女	居宅	話を聞いてほしい	楠
5/11	U さん	女	居宅	水道の業者に連絡したい	山内
5/16	NU さん	女	居宅	生活保護の利用に関する相談	山内
5/24	TH さん	男	居宅	脱路上後の近況報告	山内
5・25	不明	男	不明	給与未払いに関する相談	山内
5/25	KH さん	女	居宅	話を聞いてほしい	山内
5/30	M さん	男	病院	退院後の生活に関する相談	山内
5/30	TZ さん	男	路上	寝る場所に関する相談	山内
6/7	KH さん	女	居宅	話を聞いてほしい	楠
6/7	不明	女	不明	弁当を配っているところを知りたい	楠
6/8	KH さん	女	居宅	話を聞いてほしい	楠
6/11	不明	男？	不明	金がなくなったので相談したい	楠
6/28	不明	男？	不明	炊き出しに関する問い合わせ	長嶺
7/8	YR さん	男	居宅	生保受給しているが財布なくした	山内
7/18	YD さん	男	居宅	食糧支援の要請	長嶺
8/15	ST さん	男	居宅	食糧支援の要請	長嶺
8/22	不明	男？	不明	何言っているか聞き取れず	長嶺
10/1	不明	男	居宅	食糧支援の要請	楠

10/4	S さん	男	居宅	炊き出し情報を知りたい	須田
10/7	S さん	男	居宅	食糧支援の要請	須田
10/15	Y さん	男	居宅	食糧支援の要請	楠
10/21	M さん	男	病院	入院したとの連絡	小川
11/7	不明	女	居宅	食糧支援の要請、相談	須田
11/9	不明	男	居宅	保護申請同伴要請	須田
11/14	不明	男	居宅	風呂券が欲しいという依頼	須田
11/25	D さん	男	路上	階段から落ちたホームレスの人がいるという通報	山内
2/21	S さん	男	路上	話したかった様子	楠
3/7	S さん	男	路上	聞き取れず	柿崎
3/9	H さん	男	居宅	住環境の相談	柿崎

第8章 お世話になった関連団体の皆様・寄付をいただいた皆様

山内太郎

今年度も多くの関連団体の皆さまに協力をいただいて何とか一年を乗り切ることができました。労福会は一年ごとにメンバーの入れ替わりが大きく、毎年皆さんに教えてもらったり支えてもらったりしながら活動を続けております。コロナ禍もそろそろ終わりが見えてきたように思いますが（油断はできないけれども）、来年度以降も変わらぬお力添えをいただけると幸いです。

札幌市福祉生活支援センター様からのパンの提供がなければもはや夜回りは成り立ちません。また、炊き出しにもパンを提供していただき、多くの好評を得ております。今後もたくさんお世話になると思いますがどうぞよろしくお願いいたします。

北海道民主医療機関連合会（道民医連）様とは月1回ペース、札幌司法書士会様とは年2回のペースで炊き出しを共催させていただいております。また、11月の炊き出しではNPO法人きなはれ様に協力いただいて実施することができました。ここ3年はコロナ対応の中での開催でしたが、コロナ後を見据えて今後どのようなかたちで行うことができるかぜひ相談させていただきたいと思います。

札幌市ホームレス相談支援センター様には個別の支援活動ではもちろん、調査活動でも協力をしていただきました。また今後は炊き出しにも相談ブースを設置することになり、さらなる連携・協力をいただけることとなりました。どうぞよろしくお願いいたします。

ビッグイシュー札幌様には今年度も大量のカイロをいただき、夜回り等で活用させていただきました。また、ビッグイシュー基金様からも毎年年末に支援金をいただいております。本当にありがとうございました・

また、多くの個人の皆さまからも労福会に対する暖かい寄付をいただきました。労福会の活動が寄付をしてくださった方々の期待に沿えるようなものになっているのか心許ないのですが、皆さまからの力添えがあってこの活動が成り立っていることを心強く思っております。あらためて、寄付をしてくださった方のお名前を記して感謝申し上げます。

（2022年2月1日～2023年3月1日までに寄付をいただいた会員以外の方 ※敬称略）

阿部文雄／五十嵐文子／石神幸郎／イシザカカズヒロ／岡室恵／片桐眞／加藤朋子
城戸佳織／小林幸一／ジェリー ハルボーセン／汐川ひとみ／善野淳子／滝沢章
匿名希望／中村修／浜島和子／廣瀬知弘／フォロフライ ナカオゲン／永田深保子
平田恵子／藤田紘司／松尾晶子

第9章 会計報告

文責：長嶺卓

会計期間：2022年2月1日～2023年1月31日

1. 収支計算書

【収入】				(単位：円)		
勘定科目	年間計画(A)	決算(B)	差引(B-A)	内訳	金額	計画
会費	140,000	141,000	1,000	一般会員会費(67名)	136,000	140,000
				賛助会員会費(1名)	5,000	
事業収入	480,000	537,500	57,500	実態調査(1月)	537,500	480,000
助成金	500,000	-	-500,000			
寄付金	500,000	528,123	28,123			
雑収入	-	44,367	44,367			
収入計	1,620,000	1,250,990	-369,010			

【支出】						
勘定科目	年間計画(C)	決算(D)	差引(D-C)	内訳	金額	計画
活動費	1,635,000	1,225,532	-409,468	夜回り	101,543	90,000
				炊き出し	745,526	510,000
				同伴・フォロー	31,460	55,000
				実態調査	265,590	350,000
				その他の調査	71,000	130,000
				その他	10,413	500,000
組織費	175,000	88,856	-86,144	組織対策費	0	0
				広報費	8,910	70,000
				研修費(学習会含む)	69,616	100,000
				連携費	10,330	5,000
運営管理費	314,000	275,642	-38,358	事務所費	92,880	100,000
				会議・通信・交通費	46,826	60,000
				事務消耗品費	85,926	105,000
				活動補助費	36,080	39,000
				雑費	13,930	10,000
支出計	2,124,000	1,590,030	-533,970			
当期収支	-504,000	-339,040	164,960			

2. 資金収支計算書

2. 資金収支計算書

(1) 当期資金収支

① 当期収支	-339,040
② 仮払金・未収入金の増	58,600
③ 未払金の増	-3,000
④ 当期資金収支	-400,640 ①-②+③

今期の額⑥	前年度の額⑦	差し引き⑥-⑦
537,500	478,900	58,600
17,500	20,500	-3,000

(2) 繰越金の計算

⑤ 前期繰越額	2,156,088
④ 当期資金収支	-400,640
次期繰越金(現金と預金の合計)	1,755,448 ⑤+④

3. 監査報告書

監査報告書

北海道の労働と福祉を考える会

代表 山内 太郎

2022年度（2022年2月1日～2023年1月31日）の会計監査を実施し、計算書類および附属明細書を監査した結果、適法に処理、記載されていることを認めます。

令和 5 年 3 月 13 日

監 事 安東 朋美



監 事 沼澤 哲也



第 10 章 2022 年度会員名簿

下記の 77 名の方が 2023 年 3 月現在の会員となります。
会費未納の方は速やかに会費の納入をお願いいたします。

1	朝野未沙稀		27	楠高志		53	長嶺卓
2	東幸兵		28	久世瑞穂		54	中村大成
3	阿木爾		29	熊木実花		55	中村風五
4	安東朋美		30	小内浩		56	成田森太郎
5	飯尾智憲		31	越橋宣之		57	布川敦士
6	五十嵐文子		32	近藤紘世		58	沼澤哲也
7	石橋孝彦		33	近藤良明		59	波田地利子
8	上川拓哉		34	齋藤道恵		60	早川琢
9	上杉雪華		35	坂西太郎		61	羊屋白玉
10	内山明		36	佐々木宏		62	平田なぎさ
11	馬見俊司		37	佐々木かおり		63	平田紗梨衣
12	榎本ひより		38	佐竹正徳		64	松原有吾
13	太田圭子		39	須田伸		65	水谷敦夫
14	大野慶		40	関口祥子		66	道中将浩
15	泉彩寧		41	関本幸一		67	村井勇太
16	小笠原淳		42	高杉由壽子		68	柳瀬安寿
17	小川遼		43	高橋貴美子		69	山内太郎
18	小倉菜穂子		44	高橋一		70	山崎清裕
19	小山田伸明		45	竹内有美		71	山田大樹
20	柿崎さとみ		46	竹田桃子		72	米本智昭
21	柿畑いづみ		47	竹田風子		73	渡辺豪
22	柿山かりん		48	棚橋ますみ		74	藤川日生
23	加藤智彦		49	田畑礼人		75	高木翔成
24	亀山裕樹		50	千葉初陽		76	田中未唯
25	亀山紗希		51	陳 勝		77	兼本海音
26	木村将人		52	東松裕佳			

第 11 章 審議事項

1. 2023年度の役員について

- ・代表（1名）：山内太郎（留任）
- ・副代表（2名以内）：柿崎さとみ（留任）、長嶺卓
- ・事務局長（1名）：阿木爾
- ・事務局次長（1名）：田中未唯
- ・監査役（2名）：安藤朋美（留任）、沼澤哲也（留任）
- ・支援者相談員：平田なぎさ（留任）
- ・会計（2名）：朝野未沙稀（留任）、長嶺卓（留任）

2. 2023年度の活動に向けた論点

①アフターコロナを見据えた活動の在り方について

すでに運営会議等で議論になっているが、ここ数回の炊き出し参加者数が増加傾向にあり、財政的な状況も含めて見直しが必要な状況になっている。そこで本日の総会では、来年度の炊き出しのあり方について議論していきたい。

②会員の確保及び活動への参加率の向上を目指そう

恒常的に活動に参加できるメンバーは常に不足しているため、会員募集は会の存続にかかわる課題である。これまで同様に、特に学生会員の比率向上を目指して様々な企画を検討したい。今年度実施した合宿型学習会等の総括も必要だろう。

③2023年度の予算の考え方について

次頁の予算案は、今年度の決算額を参考に立てたものだが、上記①、②の議論を踏まえて修正する必要がある。ここ数年は繰越金を少しずつ取り崩す方向で執行している。

①収入

今年度もそうであったが、助成金収入をどこまで考えるか。さぼーとほっと基金がダメだった場合、あらためて別の助成金を申請するのか確認が必要である。寄付金を今年度と同程度に見積もったが、少し甘い見通しかも知れない。

②支出

さしあたって炊き出しの費用はさぼーとほっと基金の申請書ベースで算出した。学生会員募集のための広報費は今年度ほとんど執行できなかったが、今年度と同額を計上したのでぜひ来年度は会員募集のための取り組みを強化してほしい。

**2023年度 会計予算案
(2023.2.1～2024.1.31)**

北海道の労働と福祉を考える会

収支計算書

【収入】

勘定科目	23年度予算(A)	22年度決算(B)	差引(A-B)	内訳	金額
会費	160,000	141,000	19,000	一般会員会費(80名)	160,000
事業収入	537,500	537,500	-	実態調査(1月)	537,500
助成金	319,000	-	319,000	さぼーとほつと基金	319,000
寄付金	500,000	528,123	28,123		
雑収入	-	44,367	-44,367		
収入計	1,516,500	1,250,990	265,510		

【支出】

勘定科目	23年度予算(C)	22年度決算(D)	差引(C-D)	内訳	金額
活動費	1,376,000	1,225,532	150,468	夜回り	100,000
				炊き出し	846,000
				同伴・フォロー	35,000
				実態調査	270,000
				その他の調査	75,000
				宿泊事業	50,000
組織費	180,000	88,856	91,144	組織対策費	0
				広報費	70,000
				研修費(学習会含む)	100,000
				連携費	10,000
運営管理費	242,000	275,642	-33,642	事務所費	100,000
				会議・通信・交通費	47,000
				事務消耗品費	45,000
				活動補助費	40,000
				雑費	10,000
支出計	1,798,000	1,590,030	207,970		
当期収支	-281,500	-339,040	57,540		

布川敦士

今年は、東京で就職して以来はじめて夜回りに行かない年になりそうです。

仕事、長めの出張、趣味と色々言い訳はあるけど、どうやら自分は複数のことに同時に関心を注ぐことは不向きらしい。

変化があったのは、まあそれでもいいか、と諦めでもネガティブでもない心境になりつつあることで、30 という年の影響を感じます。(そんな中でも GW、9月の合宿と札幌に行けたのは我ながら驚いてるし、寄る場所がある有難さをしみじみ感じる)

趣味といえば、合宿でお世話になった観音寺の近くに、外でボルダリングできる場所があるそう。(“アヨロボルダー”で検索)

何とも呑気ですが、趣味と趣味を絡めて？遊ぶこともいいなあと思ったこの頃でした。

道中将浩 「葛藤の日々で自分と向き合う」

「道中さん来年の事務局長やりませんか？」

と、前事務局長の長嶺君から LINE をもらった。そのときから、この1年間は事務局長を務めさせてもらった。当初、やりたくなかった気持ちがあった。事務局長になった後も労福会に悩まされた部分は多いし、葛藤の日々であった。でも、この1年振り返ってみて、やってよかった、その言葉に尽きる。

「ボランティアってなんだろう、これってやっている意味あんのかな？」

ホームレスを支援することは、学生時代だけではあまりにも短く実りがないものだ。夜回りでパンを渡したって「来るの遅い」「今日はパン少ないなあ」と言われる始末。最初はやる意味あるのかなとすごく考えた。ただでさえ忙しくて、他にもやりたいことがあるのに、時間を削って活動に行く必要性あるのかなって。時間に追われて余裕がなく夜回り行けないことも多くあった。自分が余裕じゃないと、人に優しくできない。最もだ。事務局長なんて引き受けるんじゃないかと思ったときもあった。表では良い面して優しいふりをしてるけど、中身には優しくない自分がいる。そんな自分に嫌気がさすことが多かったように思う。

「あの頃と同じではないか」

実は、私は進行性身体障がい者の母を持ち、小学生の頃から家の手伝いや少しの身体介護をしてきた。今ではヤングケアラーという言葉により知られることとなったがその一人であったと思う。もっと友達と遊びたいのに、家の手伝いをしなければならない。もっと自由に生きたいのに、家の都合で自由にいかない。そんな過去の自分は忙しかった。それでも家庭では良い子供で、学校では優等生で、友人関係は無難に良好に保ってきた。その時の自分は、心にも時間にも余裕がなくイライラやモヤモヤが募った。そんな自分に嫌気がさして、逃げ出したくなって地元を離れ北大に進学した。しかしながら、逃げてきたにも関わらず、北大に進学した後は母の体調が気になって仕方がなかった。でもいまさら連絡なんて取るなんて恥ずかしい。一度落ち着いてから、過去の自分に余裕がなかったことに気づき後悔した。労福会の活動に参加して、余裕がない自分という、同じような状況に直面した。

「ここで逃げ出したらだめだ」

過去の後悔もあったからこそ労福会を続けようと思った。やり続ければ、何かわかるんじゃないかって。これが、労福会の活動を続けた理由かもしれない。毎回自分と向き合い葛藤。答えは見つかったと思えば、また新たなモヤモヤが募る。優しさの限界、ボランティアの意味、社会の不平等、本当のやさしさ、生きる意味。1年半くらい考え続けてやっと自分の中でも、活動をする理由が分かってきたかもしれないし、続けてきたからこそ、見えてきたものが多かった。逃げなかった自分を認めたいと思う。

「もっと多様な学生で、色々なことを企画して楽しくやりたい」

こんな葛藤を抱える毎日でも、労福会の活動を継続してやってきてよかったと思ってる。それでも心残りはいくつもある。先程も書いたが、ホームレス支援は実りが少ない、支援が思い通りになんていかない。その中でもホームレス支援は継続することが大事である。継続させるには、「楽しくやること」に尽きると思う。事務局に入ってから、過去の Facebook や、活動内容のファイルを見た。そこには、炊き出しや勉強会など、学生が主体となり面白そうなことしている様子があった。私も多くのことを学んできたからこそ、もっとみんなと共有したかったと思う。福祉への入り口はなんであれ、楽しくすればもっと福祉に興味を持ってくれる人増えるんじゃない？ 今年も労福会ランニングクラブというのも発足し、とても楽しかった。ボランティア団体でも団体内でこのような活動があることがとてもいいと思ったし、楽しい企画ももっともっと開催していければと、私の僅かな心残りとは今後への期待である。

「これから」

来年度からは新社会人として社会に飛び出る。きっとこれまで考えてきたことが活かされることもあれば、それが邪魔することもあるかもしれない。ビジネスの世界でこれまで福祉に携わって培ってきたことが壊される不安も大きい。それでも生まれたからには、世の中変えたいし、社会にインパクトを残したいと心の中で思っている。まだまだ葛藤していく人生で悩むこともたくさんあると思うが、またそのときは労福会に帰ってきたい。はじめにでも書かせてもらったが、この労福会の存在は（特になみすけの存在なのかもしれないが）、良い社会資源なのかもしれないと感じる。労福会が帰ってくる場所であるのは間違いない。また一杯よろしくお願いします。

近藤良明

昨年10月に勤医協で65歳の満職を迎えましたが、今年1月から同じく勤医協の看護学校で事務職のアルバイトをしています。引き続きよろしくお願いします。

さて、勤医協の無料低額診療のパンフレットを炊き出しや夜回りで配布させてもらっています。

無料低額診療とは概ね以下の通りです。

- 社会福祉法で定められている制度。第2種社会福祉事業。
- 生計困難者のために、無料又は低額な料金で診療を行う事業。
- 実施医療機関が審査、認定を行う。有効期限は医療機関の内規による。

勤医協は創立以来「無差別・平等」の医療・福祉の実現をめざして活動を行っており、「差額ベッド」代を徴収せず、お金が無くても具合が悪ければまず受診を呼びかけてきています。

無料低額診療について勤医協では札幌市の生活保護基準（2008年度）を準用し、窓口負担の減免を行っています。1ヶ月の収入が生活保護基準の120%以内、又は就学援助や奨学給付（高校）を受けている世帯全員の、窓口負担の全額免除を行っています。また、140%以内の方は一部を免除しています。生活保護基準は年々改悪されてきているので、改悪前の年度を基準にしています。また、ホームレス、住居喪失不安定就労者（ネットカフェ難民など）、DV（ドメスティック・バイオレンス）被害者、外国人などに対して原則1ヶ月を適用期間として無料診療を行っています。

ただ、残念ながら制度の**対象事業所に保険薬局が含まれないため、院外処方せんの薬代は対象外**。そのため、保険調剤薬局に行くと薬代の窓口負担が発生します。これは、国が医薬分業を推進し、法律の対象から外れる部分を作ったことが原因なので、国が制度を変えれば済む話なのですが、社会保障費抑制政策の中でそれが実現できていません。

国の制度が変わるまでの間、自治体で助成して欲しいという運動が各地で起き、北海道では、旭川市、苫小牧市、帯広市、東川町、東神楽町、浦河町などで、薬局での窓口負担を助成する仕組みが実現しています。

札幌市においてもぜひ実現して欲しいと、10 年余に渡って市当局との懇談・要請を繰り返していますが、「国の制度」だとしてまだ実現できていません。署名運動にも取り組んでいます。みなさんのご協力をお願いする次第です。

そもそもその運動の協力を求めて労福会で学習会を開催して頂いたことが、私と労福会の出会いでありました。新しい人が多くなったので、また、学習会をして欲しいと思っています。

柿山かりん

初めての寄稿になります。温かい目で何卒よろしくお願いいたします。

労福会に入ってから、早 1 年が経ちました。そもそものきっかけは大学院の研究室繋がりです。決して貧困と福祉課題に興味がある、とかボランティアがしたい、とか慈悲から来る思いではありませんでした。もう少し酷く言うと、不要な弁護士たちによる双方のくだらないバトルで互いに衰弱していく身内の様子を横目に、ボランティアなんてやられるか、とまで思っていました。言ってしまうとケチな人間です。

話は変わって、今年度事務局長の道中さんの調査の付き添いで念願の沖縄に行ったとき（みっちーさん、本当にありがとうございます。）、私は一人で炊き出しが良く行われているという警察署の隣にある公園に散歩に行きました。梅雨時期の晴れた月曜の昼 1 時、私は一人、野良猫を追いかける振りをして、日陰でお酒を飲んでいる人たちに近づいていき、親切なことに2 時間ほどお喋りを楽しみました。夜 20 時、再びその公園に寄ると同じ人たちが同じ場所にまだ居ました。沖縄の夏はクーラーの無い家に下手に居るより、外に居たほうが快適なのとか。暗がりの中、するめか何かを食べながら「早く帰りなさい。」と叱られたのでさっさと帰りましたが、彼らには帰る場所はあるのか。私がただ土足で団欒中の「家」に侵入していただけなのか、猫が彼らに治してもらった傷跡を舐めながらこちらを睨んでいたのか、それっきりです。

アメリカのポートランドはアメリカで 1 番住みやすい街、と謳われていました。それを信じて勉強しに行った結果、日曜の午後の州都は雨の中寝っ転がって喚いてる人と、駅で叫び暴れる人を保護する保安局しか居ませんでした。スタバは 2 店舗とも治安悪化で閉店。路地裏どころかメインストリートに連なる夥しい数のテント、大学内でピンク色の液体をぶちまけるホームレスらしき人、あたりに充満する大麻やヘロインの香り、探せばすぐに見つかる使用済みのニードル、相次ぐ発砲事件。政治家の大幅な変革により、南北から合法化された麻薬を求めて来た人の流入により、たった 3 年でスキッド・ロウ化してしまったと

のこと。正直、労福会での夜回り活動を一回もしていなかったら、道の真ん中で1人メソメソ泣いていたかもしれない。こんなのが普通だなんて、全然住みやすくない。

最後に「人を助けたい」と常日頃から思っているわけではないので、日頃の活動でその見返りを求めることも毛頭無いのですが、「助けてほしい」にはいつでも手を差し伸べられる人間ではありたいと思っています。宮沢賢治みたい。労福会での皆さんとの活動で、そう如実に思いました。労福会の皆様は、温かく、礼儀正しく、優しく、活動が終わったら急にだらしなくなる人もいるのが魅力の一つだと思います。スーパー拝金主義やキャリア至上主義、最近では功利主義に偏りつつある、自分の中でできれば否定したい価値観をシュワシュワ溶かして、自分もあの人も同じ人間であることを忠実にわからせてくれる、その感覚に自分は少し助かっています。楽しくやっている貧乏学生ではあるけど、貧困では無いことをとても実感できています。皆さんのこと大好きです。

おじゃ

2013年の夏、セミの鳴き声満ちる大滝セミナーで、下郷事務局長と小川事務局次長が話す路上生活者の話を聞きました。それは千葉恵先生が主宰する夏合宿での一幕で、私には理解できない思想と感情に触れた契機でした。しかしながら、功名心に喘ぐ凡庸な大学1年生の自分には、活動の内容も彼らの疲れた顔もおおよそ納得のいかないものでした。半ば流されるままに私は夏の人数調査に赴き、幾らかの使命感と、自分が達成可能な役割を演じつつ、その実、会員側の人間の面白さと食費が浮くという打算をして通い詰めていたことを思い出します。2015年度の事務局を上田さんと2人で切り盛りした後で、学業の忙しさにかまけて今日に至り、理学博士の学位をもって札幌を離れます。私に気をかけ、少なからぬ期待を寄せてくれた人の多くは札幌にいながら沈黙する私に失望を感じたものと思います。私自身、寝る間も人権をも対価として私なりの夢と矜持のために過ごしつつも、自身の不甲斐なさが心苦しくありました。それ故に私のこの度の寄稿をお許しくださいれば幸甚です。

斯くある私にとっての支援活動での記憶は、私の関心が憶えている限りでは次のようなしめやかなものです。例えば路上生活者の痩せ我慢にも似た「大丈夫だよ」という言葉であったり、カップ麺をもらうばかりでは悪いからと私たちに気を遣って小出しで自身の身の上を話してくれたのであったり、それから腹のおさまりどころが悪く不条理に私たちに当たってくる態度や、徐々におかしくなって取り留めなく続く会話、或いは山内太郎さんの少し気合をいれてから話そうとギアを入れる雰囲気、そのようなものが思い出されて、やはり少し今でもバツの悪い気がします。そして歴代の労福会員にみるあまりに輝かしいものに妬みもし、衝突もし、憧れもし、そして宝物のように心に留めおくばかりです。

改めて思い返せばその日々において、知ることばかりでは誰も救えず、悩むかどうかなど、苦しいかどうかなど、支援するという意味では足かせのように思っていました。肯定などと

銘打って、その実は臆病さが結果的に誰も救うことをできないのだと自分を叱りつけることもありました。結局私が為したことなど何もありませんでした。それでも少なくとも私にとっては“しこり”にも似た無骨な手応えを胸の内に感じ、それが自身の人生に一定の方向性を与えるのを感じます。そうです、私は支援活動といいながら、自分のことしか考えていませんでした。しかしこの世の労働と福祉、その背景にある根源的な生きることの不自由について私は私なりの仕方で、この世界を穿つことを諦めずに考えつづけています。すなわちそれが“私の労福会”です。最後になりますが、関わり合ったすべての方にこの場を借りて改めてお礼申し上げます。

今まで私、労福会、これからも私、労福会。
世の果てまでどうぞよしなに。

小笠原淳 「よろしくどうぞよろしく」

ほぼ名ばかり会員となり果ててからもう 5 年以上が過ぎました。まことにもって面目ないことです。札幌の路上が今どういう按配なのか、すっかり疎くなってしまいました。

とはいえ路上はいつでも足下と地続き。いずれ「名ばかり」を返上、というか真つ当な活動を再開できる甲斐性が身についた折には、懲りずによろしくお願い申し上げます。

サミー 「わたしと労福会と盲導犬協会 2023.3」

盲導犬のパピーウォーカーというのをやっている。盲導犬候補の仔犬を生後 2 か月くらいから約一年間預かって飼うというボランティア。

視覚障害者は電車のホームから転落、踏切など電車で事故にあったり、札幌市内にも各地に設置されている点字ブロック、破損していたり、古くなって摩耗していたり、商品展示したり、自転車駐輪されたり、気にしていない人々がわざわざそこに立っていたりと様々な理由で半数以上の人が移動中の事故にあっている。

賢い犬がテキパキと一緒に動いてくれたらそれはかなりありがたいのでは。

でも盲導犬に適している犬はごくわずか。盲導犬協会では最も適している犬たちをマッチングさせている - 盲導犬パピーは究極のデザイナーズベビーである - が盲導犬になれる犬はパピーの中の 2～3 割。非常に難しい。

盲導犬は他のお仕事する犬と決定的に違うところがある。それは『不服従』。警察犬や介助犬などはユーザー or マスターである人間の指示に従えば良いだけなのだが、盲導犬はユーザーが「行け」と指示を出しても、『それは危ないのであなたの命令には従えません』と自ら判断して指示と違う行動をとる必要がある。ほとんどの場合、非常に従順なのだがいざという時には NO と言わないけど黙って行動とる。人間社会に照らし合わせ「そんな逸材

めったにおらんやろ」と私は思う。

と言うことでウチに来ているパピーも非常に賢いです。

ところで「盲導犬はかわいそう」という都市伝説が吹聴されているが、それは全く違います。

盲導犬の仕事は鞭使って従わせる瞬間芸ではできないので、強制的にやらせるということとはできません。犬は嫌いなこと楽しくないことを長時間、長期間やったりしません。目が見えない人間が気の毒だから盲導犬になって助けてあげたいとか思ったりもしません。大変だけど給料(？ドッグフード？)いいからちょっと我慢して仕事頑張ろうとかもありません。

すごく得意でこの仕事が好きという犬だけが盲導犬をやっています。

選ばれに選ばれた超賢い盲導犬ですが、残念なのは盲導犬拒否の店舗や場所がまだまだ非常に多いということです。盲導犬がトイレをミスしちゃう確率なんて労福会の夜回りの時に誰かが漏らす確率以下のはず。

ウチのヴァドくんも盲導犬になれるかな～。9月までいるので犬と遊びたい人はいつでもどうぞ。

大野慶 「これからのこと」

4月から関西の大学でソーシャルワーク実習指導を担当することになった。だが、学部を卒業して以降は貧困の研究ばかりしてきたので、ソーシャルワークはよく知らない。それなのに実習指導を担当するというのだから心配である。先日、このことをソーシャルワーク理論研究を専門にする先生に相談したところ、「学問的な基盤が別なところにしっかりとあり、クリティカルに考えられる人の方が良いと思います」と励ましの言葉をいただき、少し安心した。でもよく考えてみると、「学問的な基盤が別のところにある」人を、ソーシャルワークの側が受け入れてくれるかはわからない。さて、どうなることやら。

山本朱莉

継続する人たち。でも年に一度行くか行かないかのわたしにも優しい人たち。

佐竹正徳

私は非科学的なものを信じない質であるが、運命論者である。些かこれらは遊離しているようにも思えるが、これらは経験則から「縁」と呼称される数々の不可思議が私にそう結論づけさせた。そして今、私の進む未来も「縁」によって引き起こされた必然であると感じ

ている。さて、直近の具体例を話していこう。私は大学受験に失敗した。しかし、今となっ
てはその事に安堵すると共に、逃げ道をなくす背水を敷いてくれたと感じる。きっとこれ
らの名のある大学に進学したとしても、貧困問題のことなど忘れ、学歴の暴力で拝金主義的
なブルジョワジー寄りの弁護士となっていたらうから。他にも、やはり偉人には挫折の経
験が必要だとか、大学受験の失敗を正当化する数多の自己洗脳は思いつくが、敬愛するロベ
スピエール...貧民の味方する弁護士となるためには学歴を捨てることが私を徳の高い人格
者へと昇華させる最善手であったのだ。これは酷く苦い薬であったが、この患者には必要な
のだと思う。

なみすけ店主

労福会と直接の関わりはないですが、北 24 条に店をだしてもう少しで 10 年になります。
そのうち 9 年前後は山内太郎率いる労福会のメンバー（土曜日の打ち上げに来る方）を知
っている。春になると毎年のことながら学生さんの場合、就職が決まり飛び立って行く、め
でたいのですが寂しいやら、悲しいやら 大人になって行くのかな。 みなさん有意義な無
駄のある時間を大切に過ごして羽ばたいてください。持論ですが無駄な時間が人生一番大
切です。

ps オオノ君なみすけトップ賞おめでとう オヤマダ君もありがとう。

チャンツ

いつも飲み会に参加させていただきありがとうございます。

阿木爾

昨年 10 月初めてろうふく会に参加してから、はや 5 ヶ月が経ちました。昨年度はろう
ふく会もそうですが、私自身の生活が大きく変化した一年でした。

今から思えば、私が何気なく「就活でもしてみるか」と思ったのが全ての始まりであった。
それを聞いた友人は就活サポート団体に誘って、当時私のメンターの誘いで今所属してい
るサークルに入りました。それから私の生活が一気に変わり、今の事務局長の道中さんを含
め多くの方々とつながりを持ち、様々な活動に参加するようになりました。改めて出逢いに
感謝し、縁って不思議なものだなと思っています。

私が初めて参加したろうふく会の活動は炊き出しでした。事前準備もせずに、当日なんと
なくで会場に来てみたら、こんなにも多くの方々が参加しているんだと驚きました。ですが、
その感情はあっという間に困惑に変わりました。というのも、私はそれまでに福祉や生活支
援に携わったことが一切なく、参加者にどう対処すればいいか分からなかったからです。そ

のような気持ちで参加していたら、いつの間にかろうふく会の多くの方々、そしてホームレスの方々とも仲良くなりました。生活支援の素人の私からすれば、ろうふく会に参加したこの半年間は文書では書ききれないほどたくさんのことを得られました。ホームレスに対する考えの変化、生活支援に関する知識、心の内を明かせる友人、ともに苦難を乗り越えた戦友、等々。

ですが、いざ事務局長になることを考えると、やはり緊張してしまいます。本来福祉に携わったことがなかったのもそうですし、大学に入るまでは部活にすら参加したことがなかった私にとって、大人数のこのろうふく会をどう盛り立てるのは、非常に難易度の高い問題ですから。しかし同時に、こんなに難解の問題を乗り越えた暁には、どんなきれいな景色が待っているんだろう、いや、考える道のり自体が素晴らしいものになるかもしれないと考えて、ワクワクもしています。ろうふく会の皆様は、私の大事な友人ですから、これからの一年間は大事な友人と一緒に道端の景色を楽しんでいきたいと思います。

思い付くままに長々と書きました。ここまでお読みくださった皆様に感謝を申し上げます。

中村風五

こんにちは。

まず僕の紹介をしておきます。

名古屋出身の21歳北海道大学工学部3年生です。

自分で言いますが、結構「お坊ちゃん」だと思います。ホームレスなんて大学3年まで見たことがありませんでした。

資源循環材料学研究室というところに所属していて、二酸化炭素を岩石に閉じ込めてカーボンニュートラル社会を作ろう！的な研究をしていく予定です。鉱山とか研究所にたくさん出張するらしいです。

課外活動として、学生が高齢者の生活支援サービスを行っている学生団体 wacco の副代表兼経理をやっています。

また、バイトで重度訪問介護とボランティア相談室の補助員をちょっとだけやります。

趣味で、走ったり、山に登ったり、Mr.Children を聴いたり、お酒を飲んだりしてます。

来年はやっていることがかなり変わっているかもしれませんね。楽しみです。

ここから本題ですが、

僕はホームレス支援に対する興味はそこそこです。正直優先順位が高い興味ではありません。

しかし、僕はボランティアという人のつながり方に強い興味があります。そのため、どちらかというと労福会のメンバーが面白いと思ってます。

僕は大学1年の頃から、映画・原作『こんな夜更けにバナナかよ』にずっと興味があります。

学生ボランティアという人の繋がり方が自分にとって画期的で面白いと思ったからです。

医学系学生に会うたびにこの話をしていたら、道中さん経由で労福会代表の山内太郎さんに大学3年の10月にたどり着きました。やっとたどり着いたなあという感じです。

大学一年のころ興味を持ってからスタートまで時間がだいぶかかってしまいましたが、ここからも労働と福祉について考える道のりは長いのでしょう。

原作『こんな夜更けにバナナかよ』でも述べられていることですが、「とにかく続けること」が大事だと思っています。

太郎さんによると、続ければ見えてくる景色があるそうです。

崇高な理念より、人を助けている感覚より、とりあえず続ける。

何も考えない時期、辛い時期があったとしても続ける、そういうふうに今は考えています。

ただ根本的に、楽しまなければ続かないし、楽しいから続けるのだと思います。

だから続けるために楽しむ。楽しむタネを労福会で探し続けていきたいと思っています。

今は参加し始めて5ヶ月目ぐらいです。ホームレスの方に覚えられていたり、名前を出してあの人はこうだね、なんて話をしたりするのが面白いと思います。

正直まだまだ分からないことばかりですが、労福会のみなさん、今後とも宜しくお願いします。

長嶺卓

やらなきゃいけないことばかりで吐き気がする。片手間に飲んでいる炭酸の抜けたぬるいコーラを本当に戻してしまいそう。会計の監査日を前にして、案の定出来上がっていない資料を眺めながら、現実逃避がてらに催促された原稿を書いている。なんで合わねえんだ数値。まあ会計の作業自体は好きではあるから引き受けているわけだけど。というかそもそも締切までの時間はそれなりにありはしたわけで、終わらせていない時点で私が悪いのではあるのだけれど。

「やらなきゃいけない」ことが嫌いだ。こんなにも嫌悪感を感じるのは何故なんだろうな、とも思う。小難しい理論的な話は、結局大学を出ようとしている今になってもわからないけど、とにかくその言葉の中にある「強制感」が嫌いなんだろうな。好きにやらせてくれよ。「人数が足りないので炊き出しになるべく参加してください」という風潮が出てきて以降、炊き出しに参加してないけど、根底にあるのはきっとそういう理由なんだろうな。ついでに述べれば「人数が足りてない」時点で、それはもううちのキャパに合っていないと思うけどな僕は。

全然違う話をするけれど、世の中に「綺麗な」音楽ばかり出回っていることがすごく不気味だと思う。無音な環境で録音して、時にはノイズゲートかけたりもして、クリック通りのかちりとしたリズムで。そんなものより、かつて古めかしいビルの一角のライブハウスで聞いた友人のバンド演奏の方がはるかに僕は好きだ。ゲイン上げすぎなのか鳴りっぱなしのハムノイズ、割れそうな声、威勢だけいいドラム、ちょっと耳を塞ぎたくすらなる歌詞、その醜悪さも含めて音楽であるはずだと僕は思う。

音楽が好きだから音楽の話をしたけど、人間って言い換えてもいいと僕は思う。どうしようもない面や醜悪な面は誰にだってあると思う。むしろそれを排除した方が非人間的にすら僕は映る。そう考えたら路上のおじさんたちはかなり人間的だと思う。(←倫理感がない発言と言われればそうかもね。) だけど、そういう人たちを「支援」する時に僕らはどういうスタンスでいればいいのだろうね、とも考えてしまう。

見るに耐えない化け物みたいな文章が生み出されているわけだけど、これもこれで紛れもなく「私と労福会」というテーマには沿わせたつもりではある。何が言いたいのか？その醜悪さを許してくれよって話です。

柳瀬あんじゅ

労福会の活動に参加し始めて1年半。初めて活動に参加したときから、1番の楽しみはチカホにいるTさんに会うこと。

Tさんは朗らかで日向ぼっこの匂いがしてくる雰囲気のおじいさん。いつも素敵な帽子をかぶっている。夏はスタイリッシュ×スポーティーなキャップで、冬はかわいらしいニット帽。冬のニット帽はかぶり方が浅くて、落っこちないか少し危うい。

Tさんと話すことが好きなので、Tさんを見つけたらラッキーと思い話しかける。

先日白い上着を着ていたら"初めて参加したの?"と聞かれた。いつか覚えてくれたらハッピー。

山内太郎

今年度はRRC（労福ランニングクラブ）ができたことによって、（僕にとって）支援活動か酒かのほぼ二択だった労福会活動に新たな選択肢が生まれた。来年度はどこかのマラソン大会に出場できるようにしたい。少なくともハーフマラソンの大会は必須であることを自分に課し、可能ならばフルマラソンに出場できるような、そんな身体に持っていければいいなと秘かに思っている。こうやってランニングしていないときにランニングのことを考えると割と楽しいことを夢想するのだが、一人でランニングしているときに頭に浮かぶのは、わりとネガティブなことだったりするから不思議である（でもある一定以上の距離を走るとネガティブ思考は解除するが多い）。こないだ走った時もそうだった。

どうしてこんな状態になるまで放っておいたんですかと、そういうセリフが頭の中に何度も浮かぶ。我慢をしても状況がよくなることはない、むしろどんどん悪くなるということは、もう何年も前からわかっていたはずだ。なのに何にも手を打ってこなかったのはあなたの責任なのではないかと。いや、言い分はある。それは日々の生活に追われてその問題に手を付ける暇がなかった、あるいはまだ大丈夫だろう、何とかなるだろう、と思っていたのかもしれない。又は逆に、開き直ってしまっていて、現実を直視したくなくて見ないフリをしていた、なかったことにしたかった、という気持ちも。なによりもそれについて人に相談することが恥ずかしいという気持ちもあったのだろう。でもある日突然、自分がままたらない状況になっていることをいろんなかたちで知ることになり、本人自身がその事実が一番愕然とする。そんなことがこの世の中にはやっぱりあるのだ。

雪の塊が残っている中央ローンを横目に見ながら、それでも確実に春の訪れを感じさせる明るい日差しの中で、僕はランニングをしながらそんなことを考えていた。もちろんこないだ支援した〇〇さんのことではない。ああ、ムズムズするお尻の穴を気にしながら、それでも今年は何とかハーフマラソンには出場するのだ。そう誓った48歳になる年の春である。

濱田航平

濱田航平と申します。

小川遼さんのご紹介で2度ほど、活動に参加させていただきました。

2回の参加で偉そうなことは言えないのですが、労福会さんの良さはいい意味での"ゆるさ"にあると思いました。

(もちろんホームレスの皆さんへの支援はいつも全力で取り組まれているのですが、)各会員さんの活動への取り組み方が様々で、ちょっと興味ありますくらいでも受け入れていただけたところが、長年にわたって活動を続けてこられた理由なのかなと思いました(飲み会の楽しさも)。

これからも末永くご活動されますことをお祈り申し上げます。

近藤紘世 「あの一件を振り返って～なにが出ていけだ馬鹿野郎！」

この様な自己陶醉極まりない文章であの1件を振り返ってしまい申し訳ありません。私は、だである口調で文章を書く事に慣れきってしまい、また敬語で文章を書くのと延々と反省と謝罪を繰り返すものになってしまうため、あえてこの形式を選びました。

年度の炊き出しで、私はホームレスに対して暴言を吐いてしまった。

当時の炊き出しの会場の入り口近くには私を含めて二人の担当者が居て、入場者の対応を行っていた。

当時、ホームレスによるハラスメント問題やホームレス同士の喧嘩などの問題があり、何かあった時、毅然として対応しなければならないのではないかと。もしかしたら、誰かが問題を起こすのではないかと。と私は考えていて、どこかホームレスの人を警戒していたのでは無いかと思う。

実際は、事件が起きるまでに入り口であったホームレスの人たちは皆、好意的であり、何か問題を起こそうという気配は感じられなかった。

ただ、もう一人の入り口の担当者が女性ということもあって、もしかしたらハラスメントをする可能性もあるのでは無いかという警戒は抜けなかった。

もしかしたら、この人も何かするのでは無いか？ ホームレスの人一人ひとり疑いながら対応していた。

そこに、酒で酔っていたと思われるホームレスの方がやってきた。

その方は、何か困ったことを抱えていて、私に対して何やら聞こうとしていた。

しかし、その方の言っていることがうまく聞き取れず、また労福会の一員として本当に恥ずべきことだったが、その人が誰なのかも全く分からず、どう対応をしていいか分からなくなってしまうていた。

私の対応が拙かったのだろう。その方は段々興奮してきてしまい、私に対して怒鳴りかけるようにしてこう言った。

「お前、何考えて活動やっているんだ！」

————それは図星であった。

私は長い間、労福会に関わって居るのにも関わらず、その方の困っていることを知らず、それどころか、名前さえも覚えていない。

一体、何を考えて活動に携わっていたのか。

何を考えていたのか。何を考えていたのか。

いや、何も考えて居なかったのでは無いか。

そう思い当たったからこそ、私はそれを聞いて大きく動揺してしまった。

動揺しているところにさらに怒声は繰り返され、他のホームレスの方もそこに加わった（ように当時の私には見えていた）。

一切の余裕が無くなった私は、ついに怒鳴り返してしまった。

「静かにできないなら、出ていけ！」

今思い返すと、何が「出ていけ」だ。

ただ自分の弱さをこれ以上突かれたくないから、楽な方法で逃げようとしただけではないか。

私が怠惰で傲慢な人間だったから、ホームレスの人間に対してそういう対応をしてしまっただけではないか。

以上の件は、私が、普段から傲慢に活動をし、その傲慢さを指摘された図星を、傲慢な振

る舞いで転嫁しようとした出来事である。

しかも、この件が起きるまで、全くその自覚が無かったのも最悪である。

あの日、私には、あの場で炊き出しに来た人を勝手に排除する権限も道理もなかった。

そして、ホームレスを受け入れてきた労働と福祉を考える会の方針を私一人の勝手に曲げることなどできなかった。

にも関わらず、私は自分の勝手に排除を行おうとして、我が身可愛さに労働と福祉を考える会が長年大切にしてきたホームレスの人たちと築いてきた信頼を踏みにじったのである。これが傲慢と言わずしてなんと言おうか。

私は労働と福祉を考える会に初めて参加したとき、ホームレスの人たちと長年築いてきた関係性を見た。

それを見て、私は一回だけの活動だけではなく、長く活動しようと決めた。

にもかかわらず、私は長く活動しても碌に考えることもできず、その理念を軽んじてしまう暴挙を起こしてしまった。

今、労働と福祉を考える会は、ホームレスの人達との関係性において一つの岐路に立たされているのは確かである。

しかし、私は労働と福祉を考える会のあり方が変わってほしくは無い。

変わるのは私であるべきだ。

私がおっと、ホームレスの方一人ひとりに誠意を持って対応し、労働と福祉を考える会の活動に一人の主体としてもっと真剣に考えて行かなければならない。

私は傲慢で思い上がりの強いクズである。

だからこそ、労働と福祉を考える会のこれからの活動を続けていく為には傲慢さを捨てなければならぬ。

最も。私のこの文章、そしてこの考え方自体、傲慢であるのだろうが。

泉彩寧

ひどくせっかちな癖に、私はいつも人から後れを取る。やろうとすること、やりたいこと、

やるべきことが多すぎて、いつもどれにも間に合わない。時間はたくさんあるはずなのに、過眠症がそれを邪魔する。

中高と生徒会、学級委員長を続け、裏方や企画、リーダーとして動くことはずっとやってきた。好きで、というか、他の人に任せる方が、怖かったから。労福はそんなことはない。いろんな面で出来る人がいて、向いている人がいて、それってすごいと思う。すごいと思う反面、悔しいとも思う。私もなにか力になれば。ホームレスの人が寒空の中工夫を凝らして眠る姿を思い出すとどうしようもない気持ちになる。会員になって3年。私は労福会員として何ができただろう。これから何ができるだろう。やりたいと思う。やるべきだと思う。それがうまく、私のリズムと噛み合いますように。

私は普段音楽活動をしている。思いや考えを伝える、形にする手段が私にとっては音楽しかなかったからシンガーソングライターをしている。コンセプトは「全ての女の子を肯定するコンテンツ」。超アイドルを自称している。アイドルの再定義をすべく、「人を笑顔にできたらそれってもうアイドルだよ」と謳っている。たまたま音楽だったけど、周りの社会活動家、アクティビストたちをみていると、私も同じなんだよ、と思うのである。少しでも、思いやりのある世界にしたい。こんなことがあるんだよ、これが現状なんだよって知って欲しい。そう願って歌っている。

私のファンは障害を持っている人が多い。日々、そういう人たちの話を聞いたり、相談に乗ったりしている。この活動が、労福会にとっていつかなにかを齎すことができればと、ただ祈り明日もギターをかき鳴らす。

柿畑いづみ

4年程前、学校の掲示板を見て炊き出しに参加したのが労福会への初参加でした。

看護学生だった私は炊き出しでは健康相談ブースへの誘導係になり、少し緊張しながらも「血压測ってみませんか？」と会場に来られた方々に声を掛けていました。

「〇〇って会場で無料で測れるからしょっちゅう測ってるよ。140くらい！」とか「いや、知るのが怖いから俺はいいや。」とか、色んな返答があり面白いなと思いながら色々な話を聞かせてもらいました。

ある二人組の方に声をかけると、一人は「さっき測りました」とおっしゃったので、もう一人に視線をやると、その方はうんとも、いいえともつかない絶妙な反応をされ、しんと沈黙が流れました。あれ私の声が小さかったか説明が分かりづらかったのかしらと、チャンスがあればしばらく時間を置いてから再度お声掛けをすることにし、一度退散しました。

炊き出しも最後の方になり、健康相談へ来られる方もほとんどいなくなった頃、さっきの方の近くを通ったので再度お声がけしてみると、その方はまたうんともいいえともつかない反応をされ、気まずい間が流れました。あまり声をかけてほしくなかったかしら、しつこかったかな、と反省しながらその方の腕に目をやると「労福会」と書かれた腕章がついている

のに気が付きました。

恥ずかしさと気まずさでさーっと全身血の気がひいたのを覚えています。

活動の回数は決して多くなかったですが、労福会に参加している個性的で面白い方々とお話するのも楽しく、労福会に参加していました。私は東京に移動してしまいましたが、東京支部的な感じで細く長く関わっていきたいと思っています。

大塚清龍 「諦めない。」

小川から北海道の労働と福祉を考える会にのせるエッセイ集を書いてくれないかと頼まれた、私は自分のためにもいい経験になると考え「いいよ」と言ってキーボードのキーを打ち始めた。

いいよとは言ったものの、自分でエッセイを書くのは初めてで、またエッセイという言葉自体、知らなかった、何を書けば良いのか分からなかったが、ネットで調べたら、エッセイとは、自由な形式で、気軽に自分の意見などを述べた散文。随筆。随想のことだと。

モロッコで3月11日に開催された、第21回、日本語スピーチコンテストにメッセージビデオを送りたかったが、しかし忙しかったのもあって送れなかった。とりあえず、私は日本語スピーチコンテストで語る予定だった、「諦めない」について書くことにした。

私はアラブ首長国連邦で長男として生まれ、そこからイギリス、モロッコ、イギリス、モロッコと移住してきた。

そんな私だが、私は幼少期のころから自由がなかった。両親は厳格なある宗教の信者だ。私はある宗教と言ったのは、決してその宗教が悪いとは思ってはいなく、あえてある宗教と言わせてもらう、私は14歳になるまで両親に束縛をされていた、束縛と聞いて、想像はつかないだろう、まあ簡単に言えば音楽禁止、学校に通うの禁止、女性との会話禁止、視聴禁止、外出禁止など、まだまだあるが、これだけ言えば異常さが伝わるだろう。

今でこそ面白可笑しく語っているが、当時は本当に苦痛で、笑い事ではなかった。14歳になる時、両親による行き過ぎた束縛に耐えきれず、私の精神が崩壊した。普通は精神病院に連れて行くが、だが両親はなぜか、あなたには悪魔がいると言われて、悪魔祓いをする人物を呼び、悪魔祓いをされた。当然治るはずもなく、最終的に、お前は嘘つきだ、演技をしていると言われて家から追い出された。

追い出されて、いろいろ大変なめにあった、モロッコでの生活は決して簡単ではなかった、まあ両親が日本語と英語だけしか喋ってなかったのもあって、モロッコでの一人暮らしは

厳しかった、それだけではない、これは誰にも理解してもらえないが、私は生まれてから自分が日本人だと思いこんでいた。モロッコに来るまで、自分がモロッコ人のハーフだと認識していなかった。モロッコの人たちは、お前は何を言っている？お前はモロッコ人だと言われて、私は納得が出来ず腹立たしく感じたことを覚えている、私はそれぐらい自分が日本人だと思っていた、私は日本人、誇り高い日本人なのだ。

私は普通ではない、いや、普通が嫌いなのだ、父親がモロッコ人だから、お前はモロッコ人だと言われるのは、私は可笑しいと考える、それはただのモロッコ集団社会が決めた価値観であり、固定概念である。ダニエル・イノウエのように、両親共に日本人でありながら、日系アメリカ人として生きたように、私も日本人として生きたい。

私は両親の元にいた頃から、日本に行きたかった、いや戻りたかったのだ。日々日本へ帰ることを夢見ながら、必死に頑張ってきた。路上で寝たこともある。普通はホームレスになれば、何もかも絶望し諦めるかもしれない。だが私は諦めなかった、いつも日本人の証である日本国旅券を見ながら、諦めない、絶対に諦めない、自分は誇り高い日本人だと言い聞かせた。私は諦めなかった、諦めきれなかった。

私は日本へ帰るためなら何でもやった、モロッコで帰国費を必死に集めようとした、だがモロッコで帰国費を集めるのは数十年掛かる、そして仕事も少ない、モロッコ人でさえ、片道 10 万円の帰国費を募るのは至難の業だと、ニューヨークにいるモロッコ人の友人は言っていた。

日本のためなら 10~20 年、100 年だろうと私は我慢する、だが私は日本のために何も貢献できず、一生モロッコにることなんてとても考えられなかった、人生は有限だ、私は時間を無駄にすることは出来ない。だから必死に日本へ帰る方法を探した、人生は選択肢にあふれている、一つの選択肢だけを見るのではなく、あらゆる視点で解決の道を探る。普通が嫌いだからこそ私はこの考えた方が出来た。

私は在モロッコ日本国大使館に国援法の利用を求めた、国援法とは領事が帰国費を貸し付ける制度のことである。だが外務省は中々難しいと告げられた。それでも私は挫けず諦めなかった、ただ前に進だけだった、そこで私は全国の支援関係の団体のリストをネットで入手し、一つ一つ助けを求めるメールを送った、まあ日本にいれば助けやすいがモロッコになると難しい。だが全国に支援団体は数千、数万とある、100 のメールを送れば、必ず助けを差し伸ばしてくれる人が出てくると、私は強く信じていた、地球上には 70 億人もの人がいると言う、70 億人の中に困っている人を助けたい人は必ずいる、助けたくない人なんてこの世に一人もいないとは思わない。人生はありえないことは無いのだ、仕事もそうだ、

就職活動で一つの面接で100%合格することなんてない、何件も何件面接して、そして職を得るのだ。恋愛や結婚もそうだ、運命の出会いを待つだけでは、恋愛や結婚は出来ない。ドイツ人哲学者マルクス・ガブリエルは言った、恋愛、結婚したければ、運命の出会いを待つのではなく、自分で愛を探すのだと。何回も何回もプロポーズして、何回も断られて、それでも諦めず必ず愛は見つかり、そして結婚できる。

私は北海道札幌市の支援団体と連絡を取り、いろいろ相談をして、結果クラウドファンディングを始めた、そして無事に成功し、令和5年1月28日、日本に戻った。

長い、長い戦いだったが、だが日本に来たからそこで終わりではない、また新たな目標を目指す。

私は日本に貢献したと思い、政治家または日本に貢献できるような仕事を目指している、労福会に参加したのも人のため、日本のために貢献したいという思いがある、誰もがお前は政治家になれないと言う、だが私はなれると信じている、そして諦めない、諦めたらそこで終わりだ、私は常に高みを目指している。私は伝えたいことは、決して一回の挑戦で諦めてはいけない、諦めない者が夢を掴み取るのである。そして自分を信じきる。

石崎龍之介

気持ちはある

気持ちしかない

竹田風子

「夜回りってどんなことするんですか？」

夜回りというワードを聞いて世間の人はまずどんなことを思い浮かべるだろう。

私が小学生のころ「夜回り先生」がやけにメディアでとりあげられていた時期があった。約一年前の私が「夜回り」という単語について知っていることはその程度であり、単語に対する解像度の低さが窺える。一般の認識もその程度だろうと思う。試しにワードで検索してみると、夜警だったり火災防止だったりさまざまな夜回りがあるようだった。

「だったら今度の土曜日参加してみれば。その方がどんな感じかわかると思うし」

初対面の小川さんの自宅で初対面の労福会メンバーと飲んだ帰り道、事務局次長だとい

う大野さんは活動について聞いてもあまり説明してくれず、興味があるなら行動で示してみろと言わんばかりだった。

「えっそんな生活困窮支援について素人の私がぼっと行って参加できるものなんですか」

「できるできる」

「部外者が参加していいの？」

「会員以外の人もいるし、初めての人もよく来る感じだから。興味あるならあとで場所と時間送ります」

釈然としないまま、じゃあ詳細送ってください、と各自帰路に着いた。

「エルプラザ二階？ 階段どこ！ 着いてるはずなのに迷子だよ。うう、会議始まってる時間になっちゃった。終わってから入ろう」

翌土曜日、挫けそうになりながら初めての夜回り参加へ。パンを配るらしいという程度の前情報のみでのこのことやってきた私はたくさん歩くコースと聞き、すすきの班を選んだ。

その日は二月の頭、目を開けたくない程度に雪が降っていた。風があり吹雪いている。回るコースのうち創成川沿い歩道は当然除雪などされておらず、すすきの班 4 人は縦になって歩いた。ベテランそうなメンバーの足跡に続く。雪の深い道を歩き、雪が肩や頭に積もる天候だとしても関係なく、パン、カイロ等を渡す対象が外で寝泊まりしているということに衝撃を覚えた。

その後も何度か参加し、段々と地下歩行空間を歩くときの目線が変わった。何も知らずに友人と遊んでいたであろう土曜夜に毎週歩いてパンを配る活動をしている人がいること。その活動が二十年もの間続いていること。きっと夜回り中の労福会メンバーにチカホですれ違っていたことだってあったはずだ。行き先やスマホばかり見て歩いていた道も自然と左右などの周りを見て歩くようになった。それぞれの班を体験し、どういうところに居るかなどの傾向もわかってきた。夜回り以外の時間でもチカホを歩くと、話したことのある人を見かけたりした。そして土曜日以外はやっぱり以前と変わらず通り過ぎた。活動に参加し始めたからといって、私はあくまで知らなかったことを少し知っているだけであり、それ以上のことは何もなかったためだった。

労福会の人たちはある意味では優しくない。そしてある意味それはとても優しい。自分達がやる範囲、干渉しない範囲を弁えている。何でもかんでもやるのが優しさではないことやできない領域に手を出さないと心得ること、労福会のスタンスは想像していたような”ボ

ランティア活動”とは明らかに異なっていた。ボランティア団体らしくないような様に拍子抜けした。ボランティア団体に対し「偽善者なのでは」といったような苦手意識を抱いていたので嬉しい誤算であった。

メンバーにより関わり方が違ったのも印象的であった。パンを渡すときに旧知の中で軽口を叩き合う人、競馬予想を共有する人、目線の高さを合わせ話を聞く人もいれば、一切雑談をしない人もいる。拒否する人に対する接し方も各人各様。こうあらねばならないという理想像などはなかった。もちろん容易に身体接触をしない方がいいなどすべきでない関わり方はあるにせよ。

知らないことを知れば知るほど、この世の中はクソだと思う。絶望したり、目を背けたいようなニュースも多い。だが知らないままよりは知る機会を得られて良かった。知ったあと自分がどう行動していくか。大きなことはできないかもしれないが、知らんぷりしたままの自分では居たくない。知ること、たまにでもゆるくでも長く参加することを知りたい。

自分はなんて安全な環境でこのように生きてきたのだろう。怖いことも危険なことも経験せず、二十五年過ごしてきた。もちろんしないことに越したことはないかもしれないが。だが、実は何も知らない安全地帯からの無自覚で無関心な言動ほど恐ろしい。自分に関係ないから（どうでも）よいという自己中心な過半数で社会が回っているのだ。ひょんなことから安全で恵まれた環境に自分がいると知った。ならせめて知ったなりの行動をしたいというまでである。

千葉初陽

昨日（3月13日）、仙台に事務所を構える新里・鈴木法律事務所でのエクスターンシップ（法科大学院の科目で、2週間ほどの研修。）を終えてきた。

どうしてわざわざ仙台の事務所での研修を行ったのかというと、同事務所には生活保護事案を多く扱っている太田先生が所属しており、「太田先生のもとで実習をしてみたい！！」と思いついて連絡してみたところ、こころよく引き受けてくれた。

弁護士実務の世界は、司法試験ワールドとはかなり性質を異にっていて、とても面白かった。また、県営住宅絡みで宮城県に申入れをしたり、院内集会に参加したり、依頼者から事件を受任するのは違う仕事も、これまた面白かった。

研修が始まるまで知らなかったのだが、同事務所のボス弁（と呼ぶのだろう、おそらく。）である新里先生は、サラ金やヤミ金、商工ローン被害等に取り組んできた人であり（ちょうどその頃、小島庸平『サラ金の歴史』（2021年、中公新書）を読んでいた）、サラ金問題の渦中にいた人に会えてびっくりした。なお、同書にも、新里先生の名前が出てくる。）、現在も、優生保護法被害弁護団の代表として戦っている方だった。目の当たりにした被害者だけでなく、他にもいるであろう被害者も含めた被害回復の運動をやっていく弁護士の姿を、短期間ではあったが間近で見られて良かった。

労福会の皆様、1年間、お疲れさまでした。

今年度は、一度しか参加できませんでしたが、東京でちょこちょこ労福会員と飲む機会があり、とても楽しかったです。またいつでもお越しください。東京支部で歓迎します。

あと、9月に夜回りに参加した際、ランニングクラブの方々がとても楽しそうだったので、わたしも、最近走り始めました。

山田大樹

二年前の5月からランニングを始めた。きっかけは猫に二度寝しても5時くらいな時刻に起こされて余った時間の使いみちに困ったからだ。ダイエットのためにもなるし、高血圧や睡眠時無呼吸症候群の治療のためにもなるだろうと思い、2kmくらいから始めて距離や時間が伸びていくのが楽しくて、気づいたら冬になっていた。雪が降ったら一旦止めようと思っていたけど、なんだか楽しくて走り続けていた。年明けくらいから北大のメインストリートを抜けて街中の方に出ていくようになり、大通公園まで行ってテレビ塔を経由して札幌駅の方に行くコースをようになった。これで家まで行くと大体11kmくらいだ。これが昨年の初夏あたりの平均的コースだった。

朝の大通公園を走ると、いつもの夜回りで会っている人たちが朝を迎えているのに遭遇した。ベンチで寝ている人、どこかへ歩いている人、タバコを吸っている人。夜回りで良く会っていたテレビ塔下にいつもいる人とは、ちょこちょこ話をした。夜は酒で朦朧としていたり、妙に攻撃的になっていたり、駅員とトラブルになっていたりしたけれど、朝はなんだかシャキシャキした感じだった。挨拶の後、札幌駅に向かって走り出すと、今度は創成川沿いの階段口にいつもいる人がボーッと座っている横を通り過ぎる。手を振ると気付いて振り返してくれるのが儀式のようになっていた。

走るの面白いよ、一緒に走る人いないかなと言っていたら、須田さんが乗ってきてくれた。山内さんも走り出すと言ってくれた。Slackにランニングクラブという名のチャンネルを作り、ちょっと気になる人たちが集まってくれた。いつも走らなくても気が向いた時でいいし、自転車に乗って伴走して記録してくれる朝野さんみたいな人もいる。須田さんに走り方を指南してもらい、大会にも出るようになった。

この一年くらい楽しいランニングをしてきたぼくらの一方で、テレビ塔下の人今年の冬に体調を崩し入院したようだ。創成川沿いの人、いつもの場所にテープを張られて居ることができなくなってしまった。健康にスポーツが出来るというのは、本当に特権なんだと思う。いつも会う人達の中にも、昔はそうしていた人もいるかもしれない。そういえばそんな話したことは無かったな。一体、長く会っていても相手のことで知らないことなんてたくさんあるものだ。ランニングはまだ続けているし労福会にもまだ居るから、その内路上の人と一緒に走ってみたいね。まあ、走る以外にも色々と人生の楽しみはあるので、その辺

の開拓をね。酒とタバコとダベリしかないんじゃないよ。

吉田泰輔

私は労福会の会員ではない。夜回りだって過去に 2,3 度しか参加したことがない。でも別に、活動に否定的ではないし、むしろ志は同じくする人たちだと思っている。ただなんとなく入っていないのと、なんとなく夜回りにも参加してないだけである。そんな微妙な立場の私に、友人の小川さんが「一文でいいから」と頼むから、ふわふわとなにか書こうと思う。

労福会は、側から見れば、路上生活者に食料を配布し、必要であれば医療・行政サービスにつなぐ、ボランティア団体といった形で映るのではなかろうか。しかし内実は少しだけ違うように私は感じている。それは、私と仲良くしてくれている会員が、ちゃんと行政や社会に対して怒りを持っている点だ。路上で出会う人の困難を対症的に、応急処置的に、解消するだけにとどまらず、根本にどんな問題があるのかを考えて見極め、そこから解決しようという意識があるように見てとれる。みな、本当に勉強熱心で頭が下がる。私が会員になっていないのも、その真面目さや熱心さが足りない自分にはまだ早いという気持ちがどこかにあるからなのかもしれない。

とはいえ、真面目なだけでもないのが労福会のみんなのすごいところだとも思っている。飲み会の『ひどさ』は、山内太郎先生を筆頭に天下一品である。これは褒めているので悪しからず。

そんな労福会のみんなと、今後もなんとなく一緒にいられたらいいなあと思っている。

小川遼 「だいたい 10 年分くらいの編集後記」

みんなから集めた原稿をとりまとめながら、微笑ましいような、愛おしいような、あるいは少し酸味の効き過ぎたビールを飲んだ時のような落ち着かない気分もある。指の痕が目立つ iPad に、うっすらと自分の顔が映り込む。老けたような気がして、傍のウイスキーをいっきに干した。

先日、中井久夫の文章の中に「戦争の墮落」という表現をみつけた。昨年 8 月にこの世を去った中井だが、彼はウクライナをどのように見ていたのだろうか。もうそれは墮落の段階にあるのではないだろうか。

外征軍が敵国土に侵攻し、戦争目的が体制転覆さらには併合である場合の大多数では、侵攻された側の抵抗は当然強固かつ執拗となり、本来の目的が容易ならぬ障壁に遮られ、しばしば「戦争の墮落」とでもいうべき事態が起こる。(中井久夫「戦争と平和についての観察」『中井久夫集 9 日本社会における外傷性ストレス』みすず書房)

戦争の墮落とは、戦争が当初の戦争目的から外れてゆき、むしろそれに反して、破壊や略奪などが起こる局面のことである。いつ終わるのかはもう指導者たちにもわからない。

国際情勢の緊張に伴ってこの国の人々もまた怯え、安全を求めている。しかしこれが罨であることはわかっている。

「安全保障感」希求は平和維持のほうを選ぶと思われるだろうか。そうとは限らない。まさに「安全の脅威」ほど平和を掘り崩すキャンペーンに使われやすいものはない。自国が生存するための「生存圏」「生命線」を国境外に設定するのは帝国主義の常套手段であった。明治中期の日本もすでにこれを設定していた。そして、この生命線なるものを脅かすものに対する非難、それに対抗する軍備の増強となる。(同書)

完全には満たされることのない安全への欲求は、暴力に対抗しうるさらなる暴力の集中へと向かう。こうした構造は警察のような国内向けの暴力装置についても同じである。一般の個人は国家指導者ほどの悪事を成しえないかもしれないが、国家という怪物を支えているのはやはり個々人の不安なのだ。

だから暴力に抗うためには、酒井隆史が示したように、恐れないこと、そして暴力と無縁でいられるなどという希望を持たないということが必要である。(酒井隆史『暴力の哲学』河出文庫)

平和を守れ！

かつて SEALDs という学生団体が良くも悪くももてはやされていた時期があった。僕が学生の頃の話だ。当時の安倍政権下において特定秘密保護法というろくでもない法律が可決され、また集団的自衛権なる概念を連中はこねくり回していた。そうした政治状況を受けての運動だった。おおよそその主張には同意できていたものの、しかし SEALDs は「平和を守れ！」と叫んでいたのだった。欺瞞と暴力に塗れたこの国で。

このことは彼ら・彼女らの生活が平和といえる状態であり、そしてそれ故に現体制の維持を求めていることを暗に示しているように思われた。そうだとしたら、僕にはとうてい乗れるはずもないものである。

全共闘運動がエリート層であることへの負目や一国平和主義批判といった論点をも内包していたことを考えると、理論的な断絶を読み取ることができるかもしれない。なにより、彼ら・彼女ら自身が自分たちは過去の忌まわしい社会運動とは異なる「ニューウェーブ」であることを自認している様子でもあった。プロパガンダの成果なのかもしれない。そしてそ

のことをマスメディアやリベラル層は歓迎していたのである。

SEALDs が悪いという話ではない。隠蔽が平和運動を担う人々の手を通してさえなされてしまうような、強固な何かがあるということである。

「で、隣に居た奴がそいつをはじいちまってさ、」

机を挟んだまま、出所したばかりの彼は少し姿勢を低くし、僕の目を覗き込むようにして言った。ぎらついている。僕は動揺しないし、そのそぶりも見せない。それが第一歩だということとはもう経験的にわかっている。信頼できるか試されているのだ。

「それで、海に沈めたんだよ。もう、何人もな。」

たとえばこの彼には平和はあるのだろうか。司法は彼を裁き社会に安寧をもたらしたかもしれないが、彼の境遇を放置した社会の側は裁いてはいない。あるいは、彼女、深刻なレベルの虐待経験をこともなげに話す一方で、おびたしい手首の傷を気にしながらデリヘルで働き続ける彼女には平和はあるだろうか。あるいはタコ部屋で過酷な労働を強いられ罵られている技能実習生たちには。あるいは、もう死んでしまったあの人には。

この社会がそれなりに野蛮であるということは比較的是っきりとしている事柄である。むしろ排除と排除に伴う下層労働者としての包摂という仕組みは資本の増殖の基本的な技術でさえあるように思われる。そして歯向かえば警察に鎮圧される。釜ヶ崎の暴動など思い起こして欲しい。これは形を変えながら各所で繰り返されてきたことだ。しかしこうした野蛮さを直視する人は少ない。

結局、何を言いたいのか。とくに主張があるわけではない。ただ、それらを見なかったことにしている人たちが、戦争という自らの身に降りかかる野蛮には怯え、縋るようにさらなる暴力を求めている場合もあるという程度の指摘である。

労福会は安全な場所じゃない。これまで会ったこともないような恐ろしい人間を励ますことになるかもしれないし、幾つも年下の少女を結局はみすみす女衞に引き渡すことになるかもしれない。根も葉もないと思われた自分への攻撃のなかに真実味を帯びた一撃を読み取ってしまうこともあるかもしれない。あるいは現場にいない人間から杓子定規の規範を当てはめられて糾弾されることだってありえる。

勸善懲悪のような単純な考え方では対処しきれない。すっきりと事態を整理してみせること自体がしばしば野蛮な行為にもなりえることに加え、そもそも何が正しいかなんてははっきりとしないことがほとんどだからだ。それぞれが悩みながら、いくらかマシに思える未

来を手繰り寄せていくしかない。これはたぶん楽なことではなくて、場合によっては酷い傷を負うことにもなるだろう。

それでも、物好きな学生たちがまたのこのこと入会してきた。微笑ましくもあり、愛しくも思う。心配でもあるけれど、あまり気を回すのは違うような気がしている。きっとそんな過保護な環境だったなら、僕は学生のうちにとっくに辞めていただろうから。

社会の周縁に身をさらし続けること。それは平和を祈ることではない。安易な希望に縋ることでもなく、恐怖に震えることでもない。少なくとも、見なかったことにはしないということである。何を見るのか。複雑なもの、捨てられた例外、正しいとはされなかった側のこと。抑圧されたりアルだ。それを見ることは、なんの罪も背負わないでいられるなどという無垢な幻想を捨てることでもあるかもしれない。人間は醜くて野蛮だ。たぶんここからしか始まらない。本当はここを泳ぐしかない。だからきっと、みんなが労福会を嗅ぎつけたその臭覚は、大きく間違っていないのだと思う。

今年度いっぱい副代表を降りることにした。来年度はたぶんいろいろと節目になるだろうから、身軽にしておきたいという理由もある。情けない話だけれど、平日にみっしりとやっているぶん、土曜の夜が精神的にキツイ。副代表については、次は長嶺くんがやってくれるのかな。優秀な人だから僕なんかよりは会の役に立つだろう。アムエルくんは事務局長をよろしくね。困ったら相談してください。道中くんはお疲れさま。大変だったでしょう。ほしの里の方も。そして小山田、いなくなっちゃうんだよね。どれだけ救われてきたかわからない。ありがとう。遊びに行くかな。佐竹くん、大阪でフグ食おうね。けいくんも。しっかりやってな。

執筆者紹介

山内太郎（代表）：第 7 章、第 8 章、第 10 章、第 11 章

道中将浩（事務局長）：はじめに、第 1 章

大野慶（事務局次長）：第 2 章

長嶺卓：第 3 章、第 4 章、第 7 章、第 9 章

近藤良明：第 5 章

楠高志：第 6 章

2022 年度 北海道の労働と福祉を考える会 総会資料

編者 長嶺卓
小川遼

発行日 2023 年 3 月 18 日